

山
ぎ
ら

第35号 平成16年11月
関東氷上郷友会

おもわず新しい

NEXT



人びとが暮らしの中で願っていたことに、それ以上のモノで、最良のカチで応えていきたい。
そして、人びとの「心」を包み、「夢」を装うことができる企業
ネクスタはそういう存在であり続けたいと考えています。

ネクスタ株式会社

東京支店 111-0052 東京都台東区柳橋1-20-4久月ビル8F TEL 03-3861-2331

ネクスタ ラッピー株式会社

東京工場 121-0011 東京都足立区中央本町5-22-12 TEL 03-3849-6611
千葉工場 270-0202 千葉県野田市関宿台町2192 TEL 04-7196-1721

ネクスタ パッケージ株式会社

栃木工場 323-1104 栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938 TEL 0282-62-3321

山
ざら

第35号

ふるさとの畔あぜ染め抜くや彼岸花



山ざる 第35号 目次

〈表紙〉常岡幹彦画「霧湧く」(20号/川代)

〈扉・目次写真〉山南町下滝にて(渡邊太紀・撮影)

ガンバレ、ヒカミノ……渡邊隆男 5

平成15年度「ふるさとの会」開催……6

祝寿の方々ご紹介……10/懇親会スナップ……14

会計報告書……16/寄附者芳名……17

〈ふるさと随想〉

三つのふるさと……大木健次 18

夕陽にフラッシュした喪失感……澤田哲生 20

思い出に残る先生……尾崎美代子 23

ふる里は遠くなるばかり……木村つた江 26

丹波の山とテニスの友……谷口 捷 28

〈丹波を撮る〉①山南町下滝点描……撮影・渡邊太紀・黒須雪子 32

②丹波の峠/風台風の爪あと……撮影・徳田八郎衛 58

▲近況・エッセイ▼

こころのアメリカンドリーム……岡田昌子 36

定年後のあれこれ……上田道代 39

白内障の手術を終えて……兼松幸夫 42

戦争を憎む……荻野久子 43

金沢文庫の由来……日置孝彦 44

喉頭がんと闘い……岡原裕泰 47

折々の記……井本義一 48

祝賀会に感謝を込めて……吉住自由造 50

▲私の職場▼開院五年「あたち眼科」……足立和孝 52

▲丹波通信▼船出した「丹波市」……足立智和 54

▲ふるさとトピックス―丹波新聞から―▼……57

▲回想記▼一中学生の大東亜戦争……児玉安正 62

▲故郷自慢▼Xに交わる郷里の街道……徳田八郎衛 67

▲美術紀行▼ウィーン美術史美術館とオーストリア絵画館を訪ねて……生田清弘 70

▲出発の時▼わが青春の彷徨……吉住自由造 76

▲見聞録▼台湾と日本と中国……渡邊隆男 80

▲BOOKS▼……90 ▲会員だより▼……92

▲インフォメーション▼ 展覧会・公演・同窓会・同好会……95

協賛広告……97／編集後記……108

人はいさよとぞら

ふるさとに

花ぞ昔の

香ににほひ



伊其相贈贈之
以芍藥

古今集 記書之

ガンバレ、ヒカミ!

会長 渡邊隆男



久方ぶりの暑い夏でした。

子どもの頃を思い出します。

麦藁帽をかむり近所の川で雑魚をとったり泳いだり、橋桁から飛び込みを競ったりしたものでした。宿題もギリギリに何とかこなし、家業もよく手伝う柔順な子どもでした。逃げ場のない古里の炎天下にもひるまなかつたあの頃を思い出します。

今年も夏恒例の高校野球に加えて、アテネのオリンピックを堪能しました。テレビの技術や画面が格段に進歩し、手に汗握るといふか、見ていて思わず手足が突っばるような臨場感で観戦することができました。

高校野球ではやはり関西とか郷里に近いチームを応援します。丹波に育ったのはわずかに十六年、東

京に住み着いて六十年にもなるというのに、こんなときには関西びいきになるのはなぜでしょうか。オリンピックはむろん日本選手です。関西ナマリなどあればなおのこと身近な気を感じます。だから選手の郷里ともなれば、みな舞い上がって、ドンチャンさわぎ、勝った! やった! よくがんばったと大わらわです。

あのゾクゾクするような熱情は、いったいどこから湧くのでしょうか。日の丸の愛国心? それともヤマト民族の血潮?あるいは先祖のDNA? 摩訶不思議な力が作用します。肌の色の交じる異民族国家もあり、各国各様に地に根の生えたようなあの温もりや親しみが無意識のうちに醸成されているのです。

スポーツはもとより一個人、一チームが結束して闘う力くらべです。あくまでも個人プレーですから、切歯扼腕、期待を一選手に託します。同じ地に育ったもの同士のこの強力な韌帯が、われわれ氷上の同郷者にも繋がっています。みなこの関東で個人プレーでがんばっています。あの女子レスリング選手の親父さんのような気合をかけ合いましょ。この「山ざる」誌で。プレープレー、タンバ、ガンバレ、ヒカミ!



平成15年度「ふるさと会」開催

平成十五年度「ふるさと会」は、十一月八日（土）正午から、東京都千代田区の九段会館にて開催された。総会、祝寿、懇親会と、いつものとおりにぎやかに執り行われ、会場は、丹波弁がとびかかって、大いに盛り上がった。

総会は、渡辺会長の開会あいさつに続いて、坂上理事の会務報告、谷口理事の会計報告、足立監事の会計監査報告があり、いずれも満場一致の承認を得た。

祝寿の部では、生田正輝さんに、会長のお祝いの言葉とともに花束をお贈りした（写真）。生田さんは、



大正十二年柏原町生まれ。ガンの手術をしたり、骨折に見舞われたりのアクシデントはあったが、それをなんとか乗り切って、許す限りご夫婦おそろいで海外に出かけたり、ゴルフを楽しんでいると、その健在ぶりを謝辞のなかでお話しいただいた。

懇親会は、兵庫県東京事務所次長森岡強司氏の祝辞に続き、丹波新聞社小田社長から「氷上郡の今」についてお話をいただいた。六町合併の話題が中心であったが、産みの苦しみを味わっている郷里の様子が汲み取れた。(本年十一月一日に氷上六町は丹波市としてスタートした。)

そのあと吉住自由造さんの乾杯の音頭で宴会の幕が開いた。吉住さんは、平成十六年には米寿を迎えるとのこと、生涯を綴った自分史を書き終えたところだとのこと。われわれ若い者は、おおいにこの両先輩にあやかっ、これからの生涯を全うしたいものである。今回の出席者は例年にくらべ、いくらか少ないようであったが、宴会はそれを感じさせないにぎやかさで、毎回の例に漏れず予定時刻を過ぎても、語らいの輪は解けない。

恒例「お楽しみ福袋」と「夢の抽選会」には、今回も大勢の有志から、バラエティーに富んだ景品のご寄贈にあずかった。厚く御礼申し上げます。なお、平成十六年九月十日開催の役員会にて、時節柄会員に景品の無心を続けるのは、控えるのが好ましいとの意見があ

り、本年より、この催しは行わないこととした。悪しからずご了承願いたい。ただし、郷友会としては、従来五本ずつだった「丹波山芋」と「丹波黑豆」を各十本に増やすことが決められたので、楽しみにご参加願いたい。

午後三時、藤田純さんの中締めで、めでたくお開きとなる。一同またの出会いを約して、九段会館を後にした。(文責・坂上)

◎平成十五年度「ふるさとの会」出席者(順不同)

〈来賓〉(二名)

森岡強司(兵庫県東京事務所次長)

入江武信(兵庫県東京事務所課長)

〈祝寿〉(一名)

生田正輝

〈会員〉

◆青垣町(二名)

足立和巳 足立静雄

◆市島町(十二名)

足立敬子 井田悦子 井出恭子 片岡クミ子

木村つた江 近藤勇 田中篤郎 高見嘉都司

鶴田ゆき子 藤田純 藤田徹 吉田勇司

◆柏原町(八名)

生田清弘 石井寿 岡吉明 岡田昌子 小田晋作

小田富士夫 常岡幹彦 徳田八郎衛

◆春日町(五名)

金出一郎 木呂子恵美子 松田けい子 三觜洋子

吉住自由造

◆山南町(十名)

池田忍 小田明子 久保春雄 勢川武彦 千葉淳子

仲一総 中居篤子 増井攻 渡辺貴美子 久保良雄

◆氷上町(十七名)

足立吉雄 上高子 上田道代 上野重喜

臼井小五郎 岸本勲 岸本敏子 岸本昌子

坂上勝朗 谷口捷 谷口浩章 長尾喜美代

仲矢美恵 藤田玲子 藤原知徳 本城英明

渡辺隆男

◆西脇市(一名)

笹倉郁子

◎お楽しみ福袋景品寄贈者(敬称略・順不同)

芦田 重秋 播磨屋のせんべい 二〇包

足立 和巳 日高昆布 一〇束

足立 静雄 草加せんべい 二箱

足立 吉雄 千葉産落花生 二〇袋

生田 正輝 播州名産扇鶴うどん 四〇束

池田 忍 津軽ぶどう村ジュース 三本

上田 道代 阪神タイガース・ミニ扇ストラップ 八本

植田 茂樹 バスタオルセット 一組

上野 重喜 ラジオ深夜便CD遠藤実「わが夢追い人生」 五本

小田富士夫 NHKラジオ深夜便雑誌11月号 五冊

岡 吉明 鎌倉半月の菓子 六箱

岡田 昌子 織田煮 三個

岡林 逸男 七味唐辛子 一五個

トルコ・ワイン 一本

チョコレート(5枚包み) 二箱

荻野 武 鳩サブレ 一二箱

片岡クミ子 モロゾフの洋菓子 一〇缶

木村つた江 自著『竹の花の咲くまで』 五〇冊

木呂子惠美子

坂口の一口あられ化粧袋入

五袋

黒豆ふりかけ

一個

岸本 勲

三色二本高級タオルセット

三〇組

健康器具セット

七組

貯金箱

一個

篠原よね子

自著『刺繍作品集』

二〇冊

勢川 武彦

図書券(三千円分)

三包

高見嘉都司

湯沸しポット

二個

高見 秀史

スワリスキーブレスレット

一個

谷口 浩章

小倉屋山本「えびすめ」

五個

千葉 淳子

丹波大納言小豆

一〇袋

常岡 幹彦

鎌田だし醤油

一打

鶴田ゆき子

明治ミルクチョココレット

一〇〇枚

徳田八郎衛

入浴剤

一組

仲 一聡

温麺

五個

中居 篤子

千鳥屋のお菓子

一〇個

原谷 洋子

乾しシイタケ

八袋

藤田 千治

狭山茶

五袋

藤田 徹

天然シルク・レッグウオーマー

一〇足

同右五本指靴下

一〇足

細川 倫夫

清水雅子著『極楽のあまり風』

八冊

増井 攻

鳩サブレ

五箱

吉住自由造

播磨焼き(おかし)

一〇包

吉田 勇司

コーヒーギフト

八個

渡辺 隆男

ワイン

八本

上 高子

図書『一日一書』

一〇冊

坂上 勝朗

高級中国茶

五袋

久保 良雄

中国お菓子

一袋

白井小五郎

新巻きサケ

五本

藤田 純

04 海洋カレンダー

三冊

関東氷上郷友会

平成一六年神宮暦

四〇冊

丹波山芋3kg

ビール券

六枚

丹波黒豆一・八l入

清酒「辛丹波」一・八l

二本

丹波山芋3kg

丹波黒豆一・八l入

五個



祝寿の方々ご紹介

郷友会では毎年の総会で八十歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当たられる七名の方々に、以下の項目でアンケートを依頼しました。そのうち、五名の方から回答頂きましたのでご紹介します。(生年月日順)

- ① 生年月日
- ② ご出身地
- ③ 上京の年月日
- ④ 上京の動機
- ⑤ これまでに最も印象に残ることは
- ⑥ 祝寿を迎えられてひと言

〈生まれた年〓大正13年・子歳・1924年〉皇太子裕仁親王、後の昭和天皇のご成婚の年。お妃(良子女王)選びでは政財界を巻き込んだの妨害工作があり、前年の関東大震災の影響もあつ

て、ご婚約内定から実に6年余りを経過していた。震災後の暗い世相の中、国民は天皇家の久々の奉祝行事に沸き立った。

震災後の新風俗として洋風化が進み、モダンボーイやガールが街を闊歩、大阪に一田タクシーが登場するなど都市生活の近代化が一段と促進された。

〈満20歳の年〓昭和19年〉インパール作戦、大陸打通作戦と軍部の必死の侵攻作戦も、米軍の圧倒的な戦力の前に太平洋の「絶対国防圏」も守れず、サイパン、グアムと玉砕を重ねつつ敗退。遂にB29による本土への

大空襲が始まった。

戦況が一段と悪化したこの年に20歳を迎えた大正13生まれは、否応もなく戦場に駆り出され、犠牲となったが、最も多く戦死者を出した前年生まれよりは、1年違いで救われた運命に感謝する人たちも多かった。

〈還暦60歳の年〓昭和59年〉年初から様々な事件がマスコミを賑わしたが、3月に起きた江崎グリコ社長誘拐に始まる「かいじん21面相」事件は、翌年にかけても食品会社に脅迫状を送り、世間を震い上がらせた。

21歳で戦後のスタート台に立ち、復興から成長へと日本経済と共に邁進した大正13生まれも、経済繁栄の一方で、日本人の伝統的な美德や道徳の頹廃に少なからぬ憂えを抱いた。

祝寿の方々に紹介

村上 久夫様



- ①大正13年4月22日
- ②春日町黒井
- ③昭和38年1月
- ④事業拡張のため
- ⑤NHKの大河ドラマで「春日局」が放送された時、その情報を早々にキャッチし、春日町とNHK、作家の橋田壽賀子さんとの橋渡し役として、一年余の間、色々と努力した結果、春日町が「春日局生誕の地」として取り上げられ、

多くの観光客が春日町を訪れ、古里の町おこし運動のお役に立てたことが喜ばしく、忘れられない。

- ⑥昨年は小学校、中学校（旧制）、大学時代の親友が卒寿を前に他界し、殊の外淋しい年であり、八十の坂を越すことが大変であることを改めて認識した次第である。

今は唯、十年来の難病と闘い、「奇跡の命」といわれながらも卒寿を迎えたことを有難いことと感謝している。と同時に、我が人生を振り返り、多くの人々に支えられて立派に主役を演じて来たとの思いはあるが、果たして周りの人々の人生にとって、よき傍役であったかを反省しているこの頃である。

谷垣 尚様



- ①大正13年7月20日
- ②柏原町屋敷
- ③昭和25年
- ④大学を卒業し、浦賀造船所（現・住友重機械）に入社するため
- ⑤色々ありますが、どうしてもビジネスに関連したことが多く、五十五歳で定年となり、第二の人生で迎えられる鉄工所での事で、(1)中国とのビジネスで、社員が製作不可能な

祝寿の方々ご紹介

大型の難しい球形タンクを受託してきた時のことです。一人で後始末を委され、商社の社長と共に上海に三十日滞在。キャンセルして中型タンクを代替することにし価格を含む交渉を成功させたこと。(2)マレーシアでの低温タンク建設工事で十か月遅れていた仕事を七十日で挽回したこと。

⑥戦後、灰塵に帰した祖国再建のために奮闘してきたが、今、日本は私利私欲の国家なき愚民が溢れ、道徳心、日本魂、良き日本の伝統が失われ、家庭・学校・教育が崩壊し、国家が瓦解し亡びんとしています。隠居しているところではありません。憲法改正、教育基本法の改正等を早急に実施し、真に日本が独立し、自ら

国を守ることの出来る本来の日本にするために、なお粉骨砕身、奮迅の努力をしなければならぬと感じている。

生田 清弘様



- ①大正13年8月27日
- ②柏原町下小倉
- ③昭和29年9月
- ④新明和工業（前身は川西航空機）転任のため
- ⑤・終戦間際に海軍予備学生として二相空（厚木）に入隊、

極めて短縮された猛烈なスケジュールの訓練を経て、航空基地での海軍生活を体験し、終戦を迎えた時期は印象的。初めて関東に進出して各地に生産拠点を作り、また東京・横浜を中心に東日本全域に販売網を整備して戦後の復興に貢献できたこと（翌翌は建設・運送・環境関連の特装車）。

⑥この夏も熱戦相次ぐ高校野球が甲子園球場で行われたが、私はこの球場が出来た年に生まれ、言わば球場とは同年。球場も噂によれば近々リフォームするらしいが、私も年なりこのことはある。ウォーキングをはじめ健康に意を注ぎつつ趣味の絵画や旅行を続けたい。今日あるのも皆様のお陰と感謝申し上げます。

祝寿の方々ご紹介

大木 千里様

- ①大正13年9月2日
- ②山南町谷川
- ③昭和41年3月
- ④夫の転勤
- ⑤海外旅行、ヨーロッパへも七か国ばかり行きました。それぞれの国でのお城、美術館など数多く印象に残っておりませんが、特にロンドンに行った翌日はエリザベス女王の誕生日で祝賀パレードがあるとのこと、急いでバッキンガム宮殿前に行き、目の前で近々と拝見することが出来ました。写真、テレビなどで見たとおりの護衛兵、騎馬隊の列、女王の水色のスーツ姿、今もありありと脳裏に焼き付いてお

ります。海外旅行での印象深い思い出です。

- ⑥六月八日、柏女のクラス会が宝塚「ホテル若水」であり、出席致しました。話に花が咲き、素晴らしく楽しいクラス会でした。私だけが遠方なので、その晩は同ホテルで武庫川のせせらぎを聞きながら一泊して帰郷しました。

藤原 知徳様

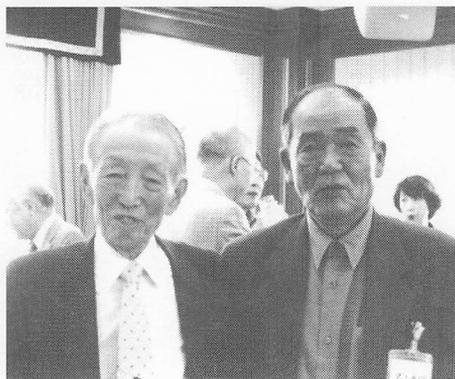
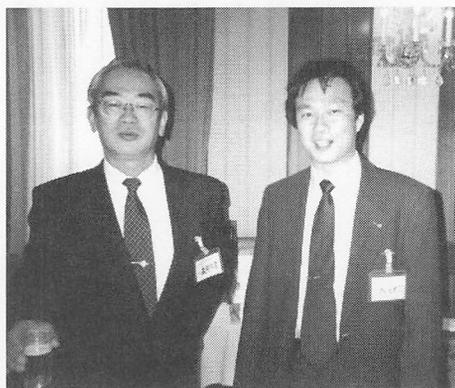
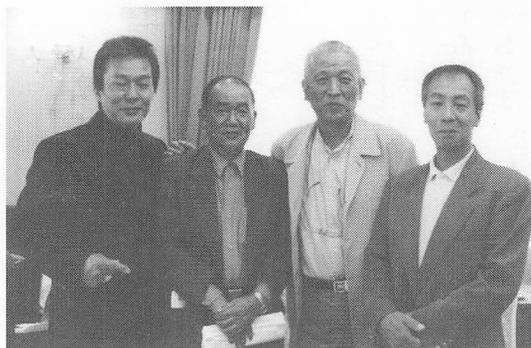
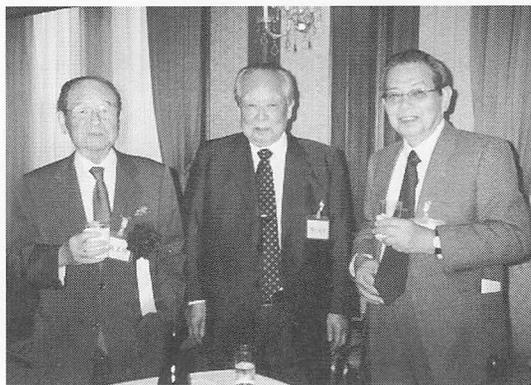
- ①大正13年10月12日
- ②水上町下新庄
- ③昭和18年3月(?)
- ④大学入学のため
- ⑤東京へ出てきて腹がものすごく減ったこと。戦争中で食糧が配給制で、下宿での一人暮

らしなのに砂糖をバケツいっぱいも配給されたが、お米は一粒もなくて……ひどい時代でした。

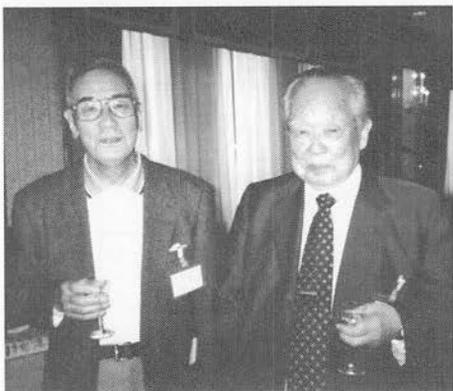
- 敗戦後、兵隊から復員してきて、また上京したが、その時も食べ物がなく、お粥を小さな丼一杯食べるのに長い行列に並んだものでした。

- ⑥「人生五十年！」織田信長の言葉じゃないけれど、ちよつと「長生き」しすぎた感じ……。だが、まだまだ長生きしようと思っっているのが本音です。





懇親会 スナック



会 計 報 告 書

関東水上郷友会

(平成15年7月1日～平成16年6月30日)

会計理事・谷口 浩章

鶴田ゆき子

(単位：円)

収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
繰 越 金	1,832,668	郵便貯金 1,032,668円 定額貯金 800,000円 振替貯金 0円	出 版 費	738,243	『山ざる』34号
			通 信 ・ 印 刷 費	149,245	総会・役員会案内等
年 会 費 収 入	386,000	延 178名	総 会 費	410,982	総会関係支払
総 会 費 収 入	379,000	55名	会 議 費	318,670	役員会等
役 員 会 費 収 入	162,000	延 47名	支 払 手 数 料	14,440	振替手数料 12,130円 送金手数料 2,310円
編 集 会 費 収 入	0				
寄 付 金	110,000	延 33名	消 耗 ・ 備 品 費	64,390	
広 告 料 収 入	772,500	延 63名	繰 越 金	1,946,237	郵便貯金1,146,237円 定額貯金 800,000円 振替貯金 0円
受 取 利 息	39	郵便貯金 39円			
合 計	3,642,207		合 計	3,642,207	

監査の結果、上記の通り相違ありません。

平成16年8月4日

会計監査

足立和巳 

秋野 

●寄附者芳名

森岡 強司殿 (兵庫県東京事務所)	一〇、〇〇〇円
植田 憲雄殿 (柏陵同窓会長)	一〇、〇〇〇円
坂上 豊殿	八、〇〇〇円
上 高子殿	七、〇〇〇円
近藤 勇殿	五、〇〇〇円
藤田 純殿	五、〇〇〇円
谷口 捷殿	五、〇〇〇円
塚口 智殿	五、〇〇〇円
谷口 浩章殿	五、〇〇〇円
荻野 武殿	五、〇〇〇円
村上 末吉殿	五、〇〇〇円
坂上 勝朗殿	三、〇〇〇円
千種 倫幸殿	三、〇〇〇円
生田 清弘殿	三、〇〇〇円
上野 重喜殿	三、〇〇〇円
浜田美代子殿	三、〇〇〇円
上田 謙殿	三、〇〇〇円
水船 隆昌殿	三、〇〇〇円

原稿大募集

本誌は会員皆様の寄稿によって作られております。どんな内容でも結構です。ふるってご寄稿ください。

●

テーマ：①ふるさと随想
 ②近況エッセイ
 ③会員だより (短信)
 ④催し (個展・同窓会など)
 ⑤丹波を撮る (写真) など

締切日：原稿はいつでも受け付けております。次号の最終締切りは平成17年8月20日です。

原稿枚数：400字詰4～5枚程度
 送付先：〒247-0005 横浜市栄区 桂町1-1-1-101 (株)ホンゴ出版内
 『山ざる』編集部
 TEL 045-895-2712
 FAX 045-895-4338

■ワープロで打たれた方は複写のフロッピーをお送りください。

梅田 重二殿	三、〇〇〇円	千葉 淳子殿	五、〇〇〇円
原 利代殿	三、〇〇〇円	小糸 イキ殿	五、〇〇〇円
山本 義則殿	三、〇〇〇円	笹倉 郁子殿	五、〇〇〇円
高見嘉都司殿	一、〇〇〇円	大石佐代子殿	五、〇〇〇円
岡 吉明殿	一、〇〇〇円	安原三智子殿	五、〇〇〇円
常岡 幹彦殿	一、〇〇〇円	塩見みつゑ殿	五、〇〇〇円
池田 忍殿	一、〇〇〇円		
山口 和久殿	一、〇〇〇円		
稲岡 俊一殿	一、〇〇〇円		
岸本 勲殿	一、〇〇〇円		



ふるさと随想

三つのふるさと

大木 健 次（山南町）



私には、故郷が三つあるような気がする。生まれてから学生生活を終える子供時代を過ごした第一の故郷（山南町谷川）。就職そして結婚をして子供の成長

長期を過ごした第二の故郷（大阪府堺市）。転勤により遠く関東（千葉県習志野市）で過ごす現在の第三の故郷。どの故郷でも二十数年の生活をしてきたために思い出も友人も多いが、過ごした時代・環境等により思い出の内容・友人の性格も異なるように感じる。

日々の生活での関心事は、第三の故郷の出来事であるが、面白いことに高校野球の成績、台風等の天災事変、新聞の記事等は、第一の故郷のことが目につき、また気がかりでもある。何か気になる情報があると、現在山南町で暮らしている実兄、或いは女房の母へ電

話をして確認をしているこの頃である。

懐かしさの点から見れば、紛れもなく第一の故郷。

今も年に数回帰郷して墓参したり知人に出会ったりしているが、故郷の変貌は目をみはるものがある。道路は、旧商店街を避けて産業道路ができ、人の流れ・車の流れが一変した。それに伴って大型店が田んぼの中に進出し、結構流行っている。反面、個人商店は確実に減少している。(この現象は、何処も同じであるが)

子供の頃、夏休には毎日のように潜って魚捕りをした両岸が竹藪の川は、川幅が広くなりコンクリートで覆われている。魚釣りをしている人影は全く見当らない。秋には、松茸採りで歩き回った山々は、下草が生い茂り入山を阻んでいる。盆前後には、境内・校庭・道路の交差点で毎週のように行われ、何重もの人垣を作った盆踊りも今では殆ど見当らない。懐かしい思い出の痕跡は、消え失せたのかも知れない。

こんな状況下にあっても変わらないのが、人情・助け合いの心である。年老いた義母が一人で生活をしているが、隣近所より毎日のように声を掛けてもらい珍しい物を入手した時は交換しており、遠隔地への用件

は、車に便乗させて貰っている。老母を一人で田舎に置いておけるのも、このような温かい人情の賜物と感謝している毎日である。

過日、身内で葬儀があった。葬儀前日・当日と二日間にはわたり多くの町内会の人が集まり炊き出し・飾り付け・金銭の出納・後始末等々全般にわたって主体的に行ってもらい滞りなく行うことができた。

土葬が火葬に変わった以外は、昔の葬儀そのものであったように思えたし、困った時の互助精神は、生き続けているのが大変嬉しかった。

懐かしさだけで物事を判断してはいけないことは、十分理解しているつもりであるが、時代の変化に押し流されることなく心のより所は、残して欲しいと願っている。

故郷は、久下村が合併して山南町となり、今年の十一月には、たんば市になると聞く。飛躍のなかで何が変わり、何が残るのか楽しみでもあり期待しているところである。

「がんばれ! たんば市」

夕陽にフラッシュした喪失感

澤 田 哲 生 (市島町)

今年の正月に三五年ぶりに小学校の同窓会に顔をだした。不思議な気分の日だった。吉見よしみ小学校では六年間に四人の先生方にお世話になった。六年生するとき担任だった男の先生は既に亡くなっておられた。あとの三人の先生方は皆元気で嬉しかった。

仕事柄、新潟県にある柏崎・刈羽の原子力発電サイトにおもむくことがある。そのとき、必ず西山町を通過する。田中角栄の生まれた村である。この町の田畑の風景や、山並み、そして何よりも空気にまじる何ともいえない気配にふれると丹波を思い出す。

※

あるときのサイトからの帰路、バスから外をぼんやり見ていたら、夕方の強烈なオレンジ色の陽射しのなかにジャガイモの生い茂る畝が飛び込んできた。その時だった、夕陽に揺れるジャガイモの葉っぱがシャッ

ターのように動き、心がフラッシュした。小学生のときと同級生の女の子を想いだした。

別に好きな子という訳ではなかった。どちらかといえば怪訝にあつかっていたように思う。苦手だったのだ。その子は、ちょっと浅黒くて、割りと気が強く、よく宿題を忘れてきていた。そして、オンチだった。どことなくとっつきにくい感じだったが、その子に友達がいなかったわけでもない。その子は、とある学期に、副委員長に選出された。六年生の時だったと思う。

相方の学級委員長にはこのボクが選ばれた。嫌がらせかと少しだけ思った。ボクが苦手に思っていたのを友達は何知っていたと思う。

委員選出の何日か前だったように思う。大半のクラスメートが何となく不可解に思っていたことが氷解した。クラスの前で、先生がこの子のことを誉めたのである。

その子は家があまりめぐまれていない模様で、ま、いわば苦境にあるらしかった。その中で、家の手伝い、つまり野良仕事や弟妹の面倒をよく見ているという説明であった。浅黒いのは日々の野良仕事のせい、宿題

は忘れていたのではなく、宿題する余裕など全くなかったのだと。

クラスの多く、特に男子はそれまでの不明を恥じるかのように、なんとなく悪いことをしていたかのよう
に感じ、教室がシーンと静まりかえったことを良く覚えて
いる。本人はちよつと恥ずかしそうに耐えていた
ような気がする。

クラスでは、そんな立派な子にリーダーシップをとつ
てもらわないわけにはいかないのではないかというよ
うな妙な分別が芽生えていた。

副委員長に選出されたその子は、ボクの目には誇ら
しげに思っているように映った。やつと認められたよ
うな晴れ晴れしさを感じているようにさえ思えた。気
が強くてちよつと嫌だなと思っていたが、とても配慮
があり気の優しい子だという一面が見えるようになっ
た。バツが悪かった。この子と果たして上手く役を務
められるか不安だった。

いつだったか思い出せないが、その子の家に一度だ
け行ったことがある。何をしにいったのかまったく覚
えていないが、病氣かなんかで休んだ日のお見舞いだっ

たかもしれない。

玄関を入ると、そこはちよつと薄暗い土間だった。
それだけしか覚えていない。それから以後、その子の
記憶はまったくない。次にその子の消息を知ったのは、
卒業後二〇年くらい経っていたとおもう。幼なじみが
「あの子は死んだんや」と教えてくれた。気の強い元
氣な子だったので、俄には信じられなかった。

難産で死んだという。「いまだとき難産で死ぬなんて
ことがあるのか……」と、ボクは不機嫌になった。な
にか取り返さなければいけないものが、手の届かない
ところにいつてしまったと思つた。それが何かはワカ
ラナイ。あの子とボクとの間にあつた何かに違いない
が、それを何だとは言えない。気持ちがかさついてき
たのをいまでもハッキリ覚えている。

※

誠とボクは長く親友だった（とおもう）。誠は頭が
良くて、素直で、文字通り誠実な男だった。彼を嫌な
ヤツだとおもつたようなことは一度たりともない。

小学校の間、誠はしばしば学級委員長をしていた。
ふくよかなまん丸顔で、リンゴのようなほっぺをして

いた。

彼との最初の思い出は、誕生会に呼ばれて家に招かれた日のことだった。そこで生まれて初めて口にしたものがある。

それは、彼のお母さんの手作りの「焼きリンゴ」であつた。妙な風味のお菓子だと思つたが、随分ハイカラなおやつだなあと感嘆したことをハッキリ覚えてゐる。それは小学校一年生の時だった。誠にはお姉さんがいて、ボクの姉と同級生だった。誠のお姉さんは、凄く勉強のできるひとだった。だから、うちの親は、しばしば私たち姉弟にハッパをかけていた。すこし迷惑だったが、相変わらず誠はイイヤツで心の許せる男だった。

誠とは高校まで一緒に、よく交流していた。特に高校の世界史の勉強では競い合つた。正確に言えば、誠にいつも助けてもらつていた。彼は、世界史の試験問題の予想を得意にしていた。ボクにもその情報を惜しみなく教えてくれた。

ふたりの試験結果を必ず互いに開陳したが毎回拮抗していた。時々ボクの方が勝つたこともあつた。これ

は、なかなかバツが悪いものである。しかし、誠は、一度たりとも恩着せがましいようなことはいわなかつた。高校を卒業すると、大学はまったく離れていたので、それ以来交流することがぶつたりなくなつた。

※

一五年後くらいだったろうか？ 二年間のドイツ赴任から帰つてきたとき、父が「知つとるか。誠くんは自動車事故でしんだんやでえ」と教えてくれた。

当時、彼は県境を越えて福知山市の大手のスーパーに勤めており、仕事ぶりが優秀でわりとトントんと昇進し、支店長クラスになつていたように聞く。

ある日の夜半、残業を終えて帰る帰途、不幸が襲つた。県境の峠を越えれば我が町という少し手前の川沿いの緩やかなカーブでハンドルをあやまつて、道路から外れ障害物に激突して死んだ。ほぼ即死に近かつたらしい。

このカーブは、帰京する度に通りがかるが、見通しもよく、たとえ疲労があつたにせよあのまじめで堅実な誠がハンドルを誤るとはどうしても思えない。狸かなんかでも飛びだしてきた結末としか思えない。漆黑

の夜のはてに消え行ってしまった。今でも化かされて
いるような気がする。

このポイントを過ぎ、峠を越えて、わが家が近いと
くると、あの副委員長の子の家があったあたりにさし
かかる。

※

高校生の時、ガールフレンドが「さわだクンのよう
な憎まれっちは、大丈夫、長生きするワよ」と励
ましとも嫌味ともつかないことをニッコリ微笑んで断

思い出に残る先生

尾崎 美代子 (市島町)

人間がこの世に産声をあげて誕生してから一生を終
えるまでの間に、私たちは一体どれ位の人々と関わり
合いを持つことでしょうか？ しかし、その中で人の心
に大きな影響を与える人はそう多くはないでしょう。

言した。その頃、純真だったボクには蜂の一刺しのよ
うな一言だった。返す言葉はなかった。

あの二人は何もいわずに逝った。そして、そのこと
をボクはすぐに知ることがなかった。進学に就職と、
ふるさとから遠ざかるにつれて、彼らとボクの間には
目に見えない壁ができていったようで、はかない。

忘れものをしたような思いは年経るごとに臓腑の底
に沈澱し、重くこびり付いてくるような気がする。
二人の墓参りさえ、ボクはまだしていない。

トルストイの民話集の中の『人は何で生きるか』
『愛のあるところに神あり』『ろうそく』『二老人』等
の作品は神の深い愛を根底にした人としてどうあるべ
きか、どう生きるべきかの指針が書かれているようで、
私の人生に少なからず影響を与えた書物ですが……。

人という字が示すように、人間は互いに支え合いの
関係なくして一人では生きていけない存在です。ある
時は支えられ、又ある時は支えつつ生きています。ど
んなに便利な世の中になったとしても、人と人との関

わり合いはより一層重要視されるのではと思います。

人間にとって良き師、良き親、良き友、良き伴侶、良き子宝に恵まれることは、何物にも変えがたい幸せではないかと思いますが、その中で、特に私の心に多大な影響を与えて下さった、今も思い出に残る先生について書いてみたいと思います。

その方は、丹波小富士と丹波霧で有名な市島町立山東中学校（今は廃校）の国語の教師だった井上敏先生です。先生のニックネームは「消防自動車」でした。何故かという、始業のベルが鳴ると同時に教室に入ってきて来られて授業が始まるからです。

「小柄な体のどこにそんなに……」と思うくらいエネルギーギッシュで情熱的な授業で、今もそのときの光景が目に浮かぶようです。先生の授業の影響で、国語は私の大好きな科目の一つでした。「先生が担任だったらいいのに」と思いましたが、残念ながら、その機会は一度もありませんでした。

しかし、先生に教えて頂いて本当に幸せだったと思います。私は先生が、何故あのような情熱的な授業を

されたのかとよく思ったのですが、その訳が解ったのは卒業後ずっと後のことでした。

あるとき、先生が戦争の体験を話して下さいました。先生は学徒動員先の工場でB29による空襲を受けました。雨のように落ちてくる焼夷弾に危険を感じて近くに見つけた防空壕に飛び込みました。後ろから来た学友に押し退けられ、二人が先に飛び込み、その後を先生が飛び込みました。その瞬間です、焼夷弾は壕を直撃し、壕は崩壊してしまいました。

後で分ったのですが、二人の学友は爆死だったそうです。先生は壕の入口付近だったので、半身が土に埋まり深い傷を負ったものの奇跡的に命は助かったのです。一番目に飛び込んでおれば、先生の命は絶対存在しなかったのです。「運がよかったね」と多くの人々から言われた先生は、幸運だけではどうしても納得出来ず、何故三人の中の自分だけが助かったのかを問い続け、考え続けられたのです。そしてやっと一つの答えに辿り着かれたのです。

それは人間の力を超えた偉大なものによって生かされたのだという解答でした。昭和二十年六月、先生が

十六歳の学生だった時のことです。それ以来、先生は人間の力を超えた偉大な力を持った絶対者である神の存在、その絶対者、神への敬虔と畏敬の念を深く持つに至ったと、自らの体験を話されました。

戦争が終わって念願の教師になった時、神によって生かされたこの命を教育に捧げようと強く決意されたそうです。

戦争による死の体験を通して深い神との出会いをされた先生が、神によって生かされた喜びと感謝と深い愛の心で全身全霊で生徒に教え続けてこられたからだったということが。

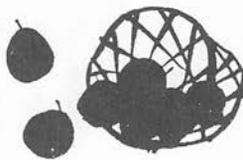
医学の進歩と共に人間の寿命がどんなに延びたとしても生まれた以上、何人となりとも死を避けることは出来ません。

私は中学校を卒業する前に、先生から「若き日の美しき思い出のために今日を清く生きたい」という言葉を頂きましたが、その言葉の深い意味をよく考えたものです。それは全ての人の行くところ、死、そしてその先にある死後の世界にむかって、生かされている命を、今を、一瞬一瞬を、大切に良心に恥じない生き方

をするようにと教えて下さったのではないか。その言葉には先生の戦争体験による神との出会いを通しての神に対する畏敬の念と、先生の決意と生徒に対する深い愛の思いが込められているのではないかと。

先生は七十歳を超えられた今も、故郷市島町の地で学童保育のボランティア、老人大学（市島町公民館）の講師として教育に携っておられます。

先生の今後益々のご活躍とご健康を祈りつつ筆を擱きたいと思えます。



丹波の山とテニスの友

谷 口 捷 (柏原町)

丹波出身の人達とのテニスは毎年行っているものであるが、本年十一月は、柏原町出身の建築家・八木大児君が、篠山新たんば荘で二泊三日の「テニス・囲碁の会」を企画してくれ、関東からは、氷上郷友会のお世話をして頂いている坂上勝朗さん及び柏原町出身の矢尾鉄太郎さんと三人で参加した。

小生はこの機会を利用して、丹波の山を登ってみようと、まず旧幸世村の最高峰十九山(七四八メートル)を考え、元氷上高校長で友人の芦田拓雄君が井中在住であることでもあり相談した。彼の話では、その山は頂上辺りに十九の祠があったのでそう呼ばれているのだが、現在登れるかどうかは不明であるとのこと。

神戸新聞出版センター発行の多田繁次著『兵庫の山やま』によると、現在の達身寺と関係が深い山であり、往時は連峰に堂塔を列ねた山嶽仏教のメッカであった

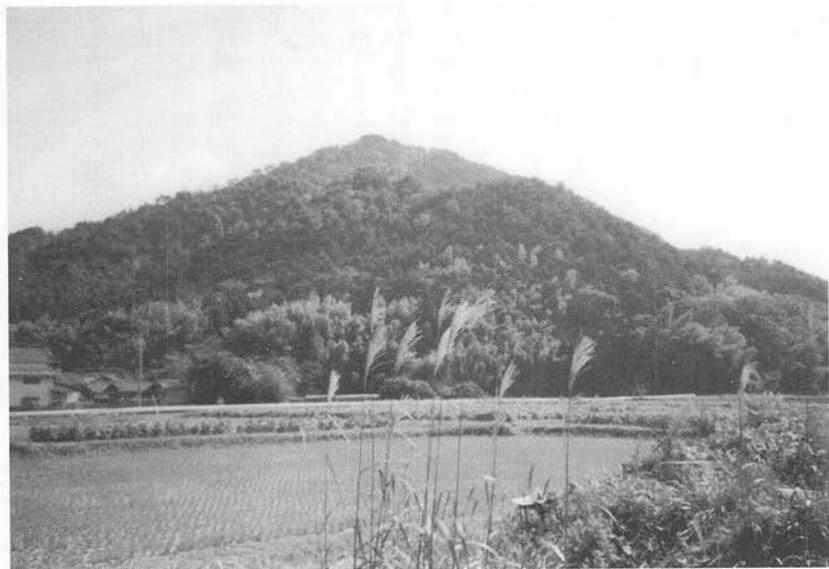
が、織田信長の丹波攻めで焼かれたもので「十九峯」という山名の由来は、弘法大師が「諸国巡歴し天下の名山を歴拜するに真に幽玄の勝景を占むるもの僅かに十九、この山、実にその随一なり」と言われたのに起因すると伝えられている。後述の神池寺が丹波の比叡山なら、こちらはさしずめ丹波の高野山であろう。

上記の坂上さんは旧葛野村出身であられるので後に聞いてみると、やはり「村の人もよう入らない」と言われた。さすがに一人で登るのは困難かと断念し、次に頭にあった黒井城と八上城を検討する。

黒井城は司馬遼太郎著『馬上少年過ぐ』(新潮文庫)の中「貂ひんの皮」で描かれている。

私の兄夫婦、それに兄の孫二人と三五六メートルの山を登る。土曜日にかかわらず他に誰の姿も見ることなく、下山中に、話し言葉から阪神方面と思われるご夫婦に会っただけで、「こんな小さな子供が登って来たのだから、私達も頑張らなければ」と言っておられた。子供も山登りの楽しさを感じるのか「良い所へ連れてきて貰った」と一人前に言うのがおかしかった。

その後、時間もあつたので神池寺に車で向かう。自



八上城址・高城山（459メートル）

分としては歩いて登る道に興味があったのだが仕方がない。旧鴨庄村は昔、京都の宮家の荘園だったそう、寺もその保護下にあり栄えていたのであるが、現在は、入山料参百円なりを徴収に來られた住職によると、檀家が四軒だそうで、養老二年（七一八）開基の「丹波の叡山」と呼ばれた天台宗のこの寺も、寺領の山林が国有地となったりで荒廃している。しかも、辺りは兵庫県自然公園となり、補助もないのに自由に変えることが出来ないと不満を言われ、維持が大変な様子である。

農地改革による田畑の没収もあったのであろう。社会の改革が文化財の喪失という矛盾を呈している。

次の日は、朝から丹波路最大の古戦場である八上城高城山（四五九メートル）に行く。井上靖著『戦国無頼』（角川文庫）の舞台になった所で、小説を読んでも悲惨な話で、甥から威されながらも一人で登ることにする。

頂上に登り、波多野公の碑を見て後、織田信長の和議と称する謀に怒り、人質である明智光秀の母や腰元、それに付侍を磔の刑にしたという松とか、落城時に朝

路姫が身を投げて死んだと伝えられている池の方に下山する。血洗いコースは、臆病なわりに好奇心の強い私も遠慮して元の道を戻る。ここでも途中で尼崎から来たという男性一人に会っただけで、篠山市街の賑いとは対照的である。

次の予定のテニスには少し早すぎると思っていると、「原始宗教聖歡喜天宝库」の建物が目に入る。我が好奇心を止めることが出来ずに拝観する。日本は勿論、チベットやインドの仏像が所狭しと置かれている。こゝまでは無料だが、有料である秘宝館がありますとオーナーに案内して頂く。中には物凄いとしか表現出来ない秘蔵物があり、その数三万八千点程だそうである。こうなると猥褻を通り越して立派な芸術、文化財である。維持費も大変でしょうと言う私を良き理解者と思つて頂いたのか、弘法大師の教えとか、皇室の心得等の話で止まることがない。歩いて一時間を予定した集合場所に間に合わないと言うと、車に乗りなさいと言って送って頂いた。なにか別世界「龍宮城」にでも迷いこんだような気持ちである。お蔭で集合時間に間に合うつし、山登り後とは思えない体の動きに、テニスの皆

さんから感心して頂くこととなった。

テニスの全メンバーは、八木夫妻と彼らの仲間二人、東京組の三人、それに矢尾さんの弟さんが岡山から来てくれた。全員が囲碁も出来るので、夜も楽しく過ごすことが出来た。

残念なことは、予定していた成松在住で歯科医の和久勝彦君が、体調良ければ見に行くという返事であったそうだが、何の連絡もなく心配していた。そして一週間後の屋久島滞在中に、訃報を宝塚在住の芦田伊久男君から受け取った。近くに行きながら会わずに帰ったことが悔やまれる。彼の元気な時、今回のテニス仲間がほとんど毎夏集まる軽井沢山荘に来てくれ、「散歩中に、知っていると思う人に会ったので挨拶すると、相手も丁寧に返されたのだが、後から考えると、それは中曽根元首相であったよ」と、とぼけながら話していたのを思い出す。御冥福を祈る。

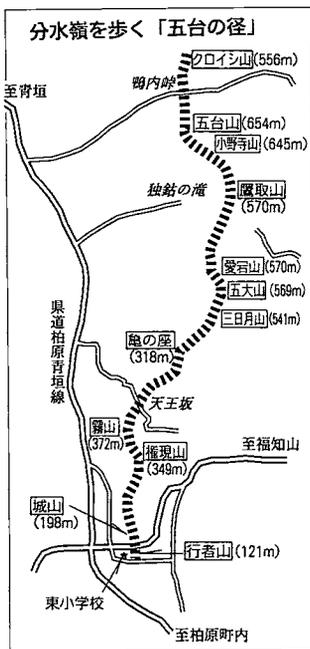
最終日の午前中はさすがに疲れて、八木君から依頼された書籍『地盤、建物の振動解析』の数式いじりを口実に、ベンチでテニスを横目に眺めながら、マトリックス演算をして過ごすこととなった。このように勝手に

を許してくれる人達に感謝しながら帰途につき、車中で夕刊を見ると、恩師の伊藤清先生が文化功労者に選ばれた記事が載っていた。先生の国際的評価からして遅かりしの感じもするが、おめでたいことである。人生とは良いことと悪いことが脈絡なくやってくるものである。和久君のことを思い悲しんでいるとき、友とは思いがけなく良い便りを呉れる。石生出身で奈良に在住の佐中哲郎君から本人製作のビデオ「花鳥風月対象の映像」を送ってくれた。これは関西テレビにも紹介され、放映されたそうである。

自然を眺めて生きることとは何よりも素晴らしい。世俗のことなんか些細なことと感じるようになるから不思議だ。山本周五郎さんは小説「ながい坂」で、「自然の容赦のない作用に比べれば、貧富や権勢や愛憎などという人間同士のじたばた騒ぎはお笑いぐさのようなものかもしれない」と述べておられる。

“同好の士”現れる、で非常に嬉しい。長い間、彼とは会っていないが、残りの人生を楽しく送るためにも、近い機会にぜひ御一緒したく思っている。

(03年12月15日・記)



(丹波新聞より)

（後記）平成十六年三月十八日の丹波新聞一面トップで、「水上町高年低山会」という魅力的な会の人達が「一二の山巡る縦走路整備」という嬉しい記事を見た。旧幸世村の五台山（六五四メートル）とか愛宕山（五七〇メートル）に並んで、私の育った南油良の山で子供の頃には、何回か登ったことのある三日月山（五四一メートル）が含まれていて、懐かしく、縦走の機会を持ちたいと感じると同時に、十九山の方もぜひ整備をお願いしたく思う次第である。

※

ふる里は遠くなるばかり

木村 たつ江（市島町）

平成十六年（二〇〇四）八月



十三日は、私の八十八歳の誕生日なのです。世間では家族や子等がお祝いをするのが習慣のようになっておりますが、私はと

てもそんな気になれない心境なのです。と申しますのも、昨年から今年にかけて実家を継いでいる姉と二人の妹が亡くなり、五人の姉妹も私だけが生き残っているからです。二男五女の兄弟姉妹でしたが、現存しているのは三鷹市にいる弟と私だけになりました。中でも柏原在住の末妹（吉竹たま子）が今年一月に急逝したことが私にはショックでした。

昨年十月下旬、私はたま子の家に五泊して、実家の姉と市島町神池に在住していた中の妹（つる子）の墓詣りを、氷上町の甥の運転で済ませてきました。翌日

は、たま子宅で私の出版パーティを、柏原在住の友達を十人程招いて開いてくれました。皆が持ち寄りの御馳走の数々の中でも、黒豆と栗の御飯の美味しかったことなど。とても妹が亡くなったとは思われず、その後二ヶ月はその悲しみが頭から離れず、体調を崩してしまふ程でした。

長男の話によれば、妹の病気は大腸ガンの末期で、医師も手の施しようがない、と家族の者に言ったのです。このことは妹には秘密にしていたようですが、入院して一ヶ月過ぎた頃、妹は長男に言ったそうですが、「私にもしもの事があっても、町役場にも近所にも知らせないでほしい」と。それから数日後に息を引き取ったとのことでした。

妹は、数年の間に三人の葬式を出した時の大変さを経験しているので、自分は子供等にそんな思いをさせたくないという、せめてもの親心だったのでしよう。私の家にさえ、今年一月下旬のうすら寒い夕暮れ、長男から「母が亡くなりました」と電話が入り、突然のことなので、すぐには信じられませんでした。

妹は二十年前に夫と死別し、残された老義父母を数

年後に次々と見送り、二人の息子は都会に出て、それぞれ家庭を持っているので、その後は独り暮らしをして家を守ってきました。農地は殆ど近隣の人に貸し、家の裏の畑で花木や野菜を作って暮らしていましたが、都会と違って村の付き合いは大変だ、とよくこぼしていました。親類や部落の冠婚葬祭、病氣見舞など色々な交際費が、独り暮らしでも一家の家長と同じで、年金生活者には重荷の様子でした。

それでも妹は健康で、病気で入院したこともなく、気の合った友人と生花や俳句、最近は絵手紙などを楽しんでいたようでした。ただ、太り過ぎが気になっていたらしく、スリムになるという健康食品を色々買って飲んでいたようですが、一向に効力がなかったらしく、身長一六〇センチ、体重八五キロを持って余していただくようです。

ただ、常習便秘症で数日に一回しか便通がなかったらしく、それが大腸ガンの原因だったのではないかと思われます。それにしても、そのガンが大人の握り拳こぶしほどになるまで何の兆候もなかったことは、妹にとっては不幸中の幸いだったのではないかと思います。

大腸ガンが途中で発見されて手術をし、その後の生活の様子などを考え合わせると、妹の性格からは生きていくのが辛かったに違いありません。最後までガンを知らなかったのが、幸せだったのではないかと思うようになって、私の心は幾らか悲しみが薄らいできたのでした。

実家の姉（九十歳）、神池の妹（八十歳）、たま子（七十六歳）、皆、独り暮らしをしていましたので、三人が亡くなって三軒とも空き家になってしまいました。私ともう二十歳も若ければ、おせっかい屋のこととて何かいい方法を考えたかもしれませんが、今ではもう自分の身体を維持していくのが精一杯で、ただ悲しい思いをしているばかりです。昭和三十九年（一九六四）東海道新幹線が走るようになってから、私は毎年二回は必ず帰郷していました。それだけで何となく心が安らぐ唯一のふる里でした。年を重ねるにつれて、子供の頃の楽しかった思い出が鮮明になるのとは逆に、ふる里丹波がだんだん遠くなっていくようで、何とも寂しい気がしております。

山南町下滝点描



丹波 を撮る

撮影：渡邊太紀・黒須雪子



古くあり新しくもあり軒庇

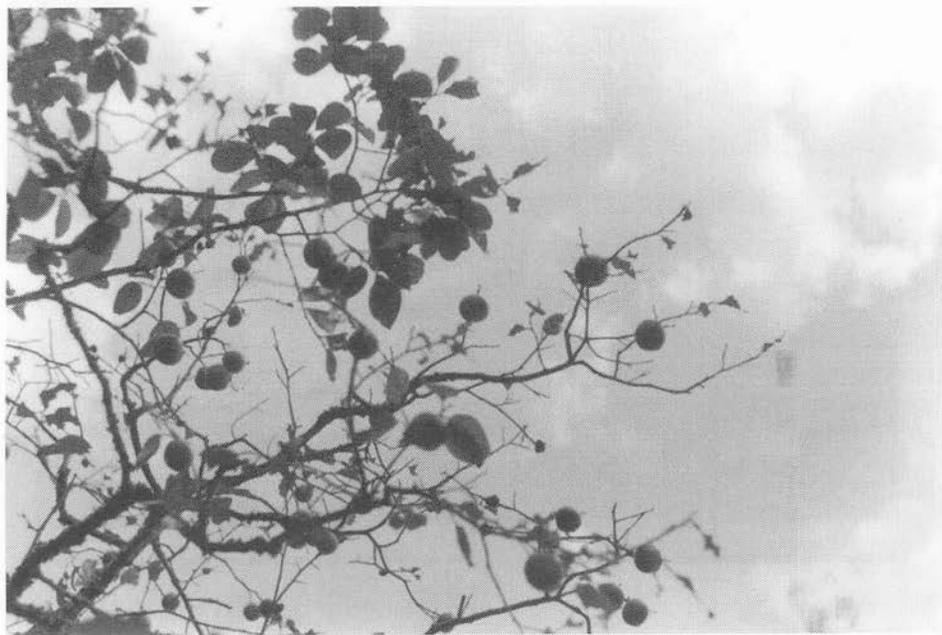
6024





川代に栗はじけるや遠花火

丹波を撮る



カタコトと柿をゆすりて福知行





近況・ エッセイ

こころのアメリカンドリーム

岡田昌子（柏原町）

♪ テレビもねえ、電話もねえ、喫茶店もねえ……吉幾三氏の替え歌ではないけれど、本当に何も無い時代に柏原で青春時代を過ごした。娯楽といえばラジオ、映画、雑誌。たまに貸本屋で漫画を借りるくらい。行動範囲は殆ど柏原のみ。パフォーマンスなんて言葉も使われていない時代に、歌と踊りが大好きな少女であった私は、欲求を表現する場が限られていた。

思う存分自己表現したい気持ちはいつの間にか鬱屈した田舎コンプレックスに変わり、映画や雑誌から窺える華やかで美しいイメージを、イーコール東京生活だと勝手に思い込み、都会でカッコよく生きる自分を夢見た。ミーハー的夢見る夢子さんである。自己を必要以上に主張することがはばかれた田舎の生活において、その抑圧された思いは「いつか東京で華やかな生活をしてやるぞ」という、余りにも漠然とした目的

の無い単純な憧れに転じていた。

大学卒業後に念願の東京生活は叶ったが、夢に描いて来た世界がどこを探してもないではないか。裕次郎や赤木圭一郎のようなカッコイイ生活スタイルはどこにも見当たらない。それもそのはず、もともと根は真面目の怖がりで末っ子の甘えん坊ときている。自分で遊びを探し、楽しさを工夫することを知らない。

その上、職業は公務員。都の民生局（現・福祉局）の仕事に華やかな世界があらうはずもない。求めているものと現実がかけ離れ過ぎていて。夢を求めてさ迷えば、銀座には手の届かない豊かさしか目に入らず、欲求不満は増すばかり。新宿で遊べば群衆の中の孤独が一層募るだけ。夢は儂くも消え、東京生活は淋しさや侘しさとの戦いになってしまった。幾つになっても理想と現実のギャップは乖離したまま、葛藤を抱えながら日常の仕事や育児に追われた。ギャップは埋まらぬままに、平凡な庶民の暮らしをして三八年になる。人生ってこんなものなのだろうか。

最近になって、冬ソナブームに触発されたのか、仕事を減らして心の余裕が出て来たのか、はたまた、た

だの老化現象なのか、若かりし頃の想いが甦る。憧れた華やかでカッコイイ生活とはほど遠いが、楽しみを見つけて実行に移すことが少しは可能になって来た。

ところがドッコイなのである。様々な楽しみ事を享受するにはやはりお金と時間と体力が必要であろう。やっとなんとか三拍子揃って「思う存分華やかな世界を楽しむぞー」と叫んでも、今度は身体が動いてくれない。限られた時間をやりくりして行きたい所は山程あるにもかかわらず、身体がストップをかけ始めた。何ということか。股関節が変形しているらしい。これでは今まで通りの欲求不満オバさんになりかねない。「よし、今のうちにやれる事はやってやるぞー！」と何か気が焦り出した。

そのような折、ブロードウェイミュージカル「42ND STREET」が一八年振りに来日公演するという。早速、七月に観てきた。三四八六回もロングランになり、また新たにリバイバルされ、各地で上演されているらしい。いやー本当に凄かった。総勢五〇人程の出演者によるタップダンスで幕が開く。もう、最初から鳥肌が立ち、心の奥底から感動が沸き起こって

くるのが分かる。何曲かは聞き慣れたメロディで、スイングジャズの演奏が身体を揺らし、夢中で手拍子を打っていた。二時間半程のあつという間、歌とタップダンスが最高で魅力満載の舞台であった。久し振りの感動で、「生きていて良かったなあ」と、こんな時に初めて生きている実感を覚えた。

ところがである、二週間後に本場NYCで、またまた「42ND STREET」を観ることになった。タイムズ・スクエアのタイトル通りの42丁目まで観て



きた。本場ブロードウェイでのミュージカルは「ライオンキング」「シカゴ」「プロデュース」と四回目。「42ND STREET」は田舎の少女が一夜にしてスターの座をつかむというアメリカンドリームのサクセスストーリーがとても分かり易いから感度も高くなる。出演者は東京公演ともに選り抜かれた人達なのだろう。タップも歌も上手くて、またよく揃っている。衣装も素敵。東京公演との違いは何枚かの衣装と舞台装置位ではあるが、やはり本場は完璧である。いやーもう、参った。コミカルで可笑しくて、素晴らしくリズムカルで、今でも頭の中をタップの音と共にメロディーが行き交う。ダンスと歌と華やかさ。まさに、私が求めていたものがそこにあった。たまたま、劇場前で行くわした主役のパトリックに「日本から来ました」と言って握手してもらい大感激。相変わらずのミーハー振りを花のニューヨークでも発揮したのであった。

定年後のあれこれ

上田 道代（永上町）

○別れ

夕風に夾竹桃の葉が揺れる六月の半ば、ひとりの友人が、逝った。定年に三年も届かぬ年齢で。棺の中の顔は温和だった生前とは別人のようで、無念の胸中をのぞく気がした。

京都を愛し、転勤願いを出してまでの古典美術への傾倒から、国宝の修復をドキュメントした秀作短編映画が生まれた。京都での趣味的生活を断念して帰京してからは、否応なく新しい事業へ、経営者側の立場へと追い立てられるように歩んで行った。五十四歳で初恋と言われる小学時代の同級生との結婚をはたして三年目の死だった。

「生きること」とは何か。定年を迎えて改めてつきつけられた出来事だった。

○歩く

五月の初旬に初めて東京近郊の高尾山を歩いた時、土を踏み、鳴き始めたうぐいすの声を聞き、新緑の木々の美しさに目を奪われ、心がうきうきとしてくる自分を発見して、やはり丹波の田舎育ちの本性が目覚めたように思った。

子供のころ、父の実家の裏山（現・篠山市犬飼）でヒバの葉をお尻に敷いて滑って遊んだり、都会っ子を山に置いてきぼりにして叱られたり、山は田舎の子供の遊び場の一つだった。

六月、奥多摩の御岳から日の出山、麻生山、金毘羅山を歩いた時は、あたり一面霧がただよい、風もなく鳥も鳴かず、静まり返った木立の中で振り返れば、今歩いた木の階段が途中から消えて……手前の目に染みるような緑の奥は木々が墨絵のように濃淡を描き、足下に雪の結晶を思わせるコアジサイがほのかに咲く、神秘的で幽玄なひとときだった。

足の疲れも遠のいた頃、誘われて尾瀬を訪ねた。



尾瀬ヶ原にて筆者



「夏がくれば思い出す……」あの歌でしか知らないそこは、深い山々に囲まれた秘境の地、美しい湿原だった。可憐なヒツジ草が咲く水辺に夏雲が映り、綿スゲの白い帽子が風に揺れ、緑の原に濃い紫のアヤメが群生する様は自然の色彩の妙味、華やかな日光キスゲなどの陰にひっそりと咲く朱鷺草やサワラン、タテヤマリンドウ、甘い香りを漂わす柳、葉の下に咲く鳴子百合……高原の厳しい環境は時の移ろいが早く、訪れた者にその日その時々のお会いを見せてくれる。

○観る

上京して以来観てきた舞台や映画あるいは美術展のチケットを一枚残らず保存している。数え切れないくらい観た。東京にいる唯一の証しかも知れない。

この時期思い出す芝居が青年座で観た「明日」だ。健康に日々を過ごしている者、あるいは病んでいる者なればこそ、皆、明日のあることを信じて眠りにつく。ある人は友と会う約束をし、ある人は明日が婚礼の日だったりする。些細な諍いも明日になれば解決するであろうと考える。今日の痛みは癒えるかもしれないと

願う。その明日が一瞬の閃光とともに全て消えてしまふ。芝居は人々が今日を精一杯生きて眠りにつくところまで終わる。八月九日の前日の夜で。

明日のない日を誰が想像しよう。それは過去の悲劇に留まらず今を生きる我々に投げかけられた平和への願いでもある。

○ふるさと

この夏、何十年ぶりかで篠山市に住む従妹たちと集い、懐かしい楽しい一日を過ごした。幼年時代を過ごさせてもらった父の実家の離れの縁側で、池の水面が陽に反射して軒下にユラユラと影を映し、鯉が時折、水面に口を開けて浮かぶのや、あめんぼうが動き回る様を見ていると、遠い昔が昨日のことのようだった。が、昔遊んだ山の上には巨大な送電線の鉄塔が建ち、思わず息をのんだ。

山深い氷上は、福知山線が最上の交通手段だったが、今JRの時刻表を見ると篠山口から奥へは不便この上ない本数の激減ぶり。墓参りの度のため息が出るが、

今は車の時代、氷上から篠山市へ、あるいは福知山、日本海方面、京阪神へ、中央縦貫、近畿縦貫と人々はいとも容易く行き来する。

♪菜の花畑に入り日薄れ、見渡す山の端霞深し……そんな風景はもうどこにもなく、山や田の真ん中を貫く道路、その脇には巨大なスーパーが立ち並び、夜にはネオンがまぶしい。当然のことながら人々の暮らしぶりもかわったであろう。

旧市街はどこもさびれ、昔と変わらぬたすまいが、わずかに過去の記憶を呼び起こしてくれる。

もうすぐ「氷上郡」という地名も消える……。

ふるさととは、いつまでも風化しない自分の心情風景に過ぎないのだろうか。そうではない、「おかえり」と微笑んでくれる人がいるかぎり、そこは懐かしいふるさと。誰にも会えなくても、風が空が山が「おかえり」と言ってくれるところ……。

東京に四十二年暮らしても、やはり東京人にはなれない。

白内障の手術を終えて

兼松 幸夫（柏原町）

「目を開けて下さい」手術をした翌日、目を覆っていたガーゼを取って、眼科医が私を窺っている。

パァーッと明るく、はつきり見える。

一昨年春頃から左目が霞むようになっていたが、テレビの字幕が読みにくく、また交差点の表示板も見づらい状態で、車の運転にも支障を来すようになっていた。

白内障の進行を薬で遅らせる程度の心積もりでいたが、眼科医院で左右両目の手術を奨められた。眼球にメスを入れるなど想像しただけでゾォーッとする。

「手術は一〇分で終わりますよ」と事も無げに言われた。

母の介護のため、築三〇年の奈良の古家に一時移っていたことから、手術は奈良の眼科医院ですることにしましたが、この医院では週二日の手術日があり、各々二

五人前後、月に二〇〇人程度の手術をしているのとこのである。

手術当日、患者二五名の手術は高齢者からというこ
とで、私は二〇番目になった。名前を呼ばれて手術台に乗ると、覚悟ができたような気がしたが、もうジタバタする訳にはいかない。目の洗浄と麻酔で一〇分、手術は一〇分で終わった。手術中、目を開き、枠をはめられて目の中が水が流れているような感覚の状態です術が進んで行くが、ただ明るくもやもやとしているだけで、何も見えない。手術は局所麻酔で行われているが、やはり痛い。どの程度まで痛くなるのか分からない。手に力が入る。片目だけにしておこうと思っていると「終わりましたよ」と医師の声がした。メガネを買う程度の費用で手術ができる、ありがたいことである。

テレビの字幕、囲碁番組もメガネなしで見える。古家のあちこちの汚れや埃までがよく見え、四、五日は雑巾を持って拭いて回っていたが、今は落ち着いている。

朝、顔を洗って鏡を見る。顔の皺やしみ、頭の白髪

が増え、正に老人の顔である。母の顔も皺だらけで、頭髪は三十年染めていて、元の色は分からなくなっている。帰ってきた浦島太郎である。

術後五〇日、「これからは通常の生活に戻ってよいですよ」

定年退職した時以来の解放感である。

ティアアップしたゴルフボールが二つに見えていたの

戦争を憎む

萩野久子（氷上町）

自分の来し方を振り返るとき、戦争中は学徒動員に駆り出され、戦中戦後の物資の乏しい時代を生きて、今日のように何でもほしい物が手に入る時代を迎え、ともかくも安心して暮らせることの倖せをしみじみと思えます。

とは言え、今もイラク、アフガニスタンなど争いが

が、はつきり一つに見える。スコアも一〇〇前後だったのが九〇近くまで戻って来た。十歳は若返った気分である。

今までのメガネが合わなくなって、レンズを取り替えることになり、思わぬ出費である。もう一方の目の手術はまだ決心できないでいる。

絶えず、不安定な国々を思う時、犠牲になるのは利害にかかわりのない一般市民の人達で、手や足を失くした少年の映像等を視るたび胸が痛み、人の人生を狂わせ、倖せを奪う戦争を憎むばかりです。

戦に聖戦などありえないし、この地球上が一つの国のように仲良く暮らせる日が一日も早く来ることを願っております。

空爆に子を失ひて仇打つと

銃持ち怒るイラクの母親

金沢文庫の由来 — 我が職場紹介 —

日置孝彦（氷上町）

金沢文庫は六百五十有余年の風雪を生き抜き、昭和五年八月八日、神奈川県立金沢文庫として甦り、今日に至っている。昭和初期、神奈川県に受け継がれた金沢文庫の旧館は、称名寺境内本堂の西側にあったが、老朽化に伴い、称名寺から尾根ひとつ隔てた「文庫ヶ谷」と呼ばれる場所に新たに建てられて移転し、平成二年十月二十四日、新装開館した。

新館は称名寺境内を通り、西側の洞門を抜けると、そこは来館者を受け入れる正面玄関の入口。かつての文庫はこの辺りにあったようである。称名寺とは洞門を通して隣接し、西側の「御所ヶ谷」に金沢氏の居館があったとされている。当時、金沢文庫は称名寺と金沢氏の居館との中央にあったことになる。はじめは「御所ヶ谷」と呼ばれたが、のちに「文庫ヶ谷」と言い伝えられるようになった。

神奈川県立金沢文庫までの最寄りの駅は、京浜急行金沢文庫下車、徒歩十五分と案内している。駅名は、金沢文庫の由緒来歴に因んでつけられたものである。

#

金沢文庫の創立者は「北条実時」である。実時は、鎌倉幕府第二代執権、北条義時の孫で、北条一門の経時、時頼、時宗三代の執権に任せ、引付衆、評定衆など幕府の要職を歴任した重鎮であった。幼い時から学問を好み、十八歳の時、儒学者、清原教隆について学び、清原家の秘説を伝授するほどの才能の持主であったことが知られている。彼は向学心に燃え政治、法政、農政、文学、兵学など広範囲に亘っており、和漢の書籍、文書の収集、書写・校合に努めたといわれている。次に金沢文庫がいつ創建されたか、恐らく実時が病気になり、鎌倉の邸宅から金沢の別荘に引き籠もった建治元年（一二七五年）頃と推定されている。事実、金沢文庫の基礎となったのは、鎌倉から金沢の地に移された書物であることは言うまでもない。その後、実時の子、顕時、孫の貞顕と引き継がれたが、なかでも第十五代執権となった貞顕の時代が最も充実していた



ことが伺い知れるのである。

貞顕は若くして六波羅探題に出仕したので京の都の生活が長く、その間、公卿との交流があった。京都からもたらされた和書をはじめ、当時、中国宋との交易によって取り寄せた漢籍（古典）、称名寺の僧たちが精力的に収集した密教の儀軌・伝授書、後に鎌倉仏教と呼ばれる宗教改革運動の胎動を伝える日本の僧の著述など数万巻の書物が集められたのである。

この中で日本の僧が著わした主なものを紹介しよう。日本曹洞宗の開祖、道元の『正法眼蔵』（一冊）は、漢文体で著わされており、和文体のものになったものと言われる珍書である。日蓮宗の開祖となった日蓮の『円多羅義集唐決』（二冊）は、天台宗の教学をマスターするための手引書を著わしたものである。時宗の開祖、一遍の『法語集』（二冊）は、善男善女の信者たちに

一遍が遊行念仏を説いた説法集である。

ここに紹介した道元、日蓮、一遍などの著書は、金沢文庫以外には現存していないものであり、いずれも鎌倉時代の貴重書である。

このように金沢文庫は北条一門や金沢氏の菩提寺である称名寺の多くの学僧らによって利用されていたが、あくまでも金沢氏の私的な文庫であったため、一般には公開されていなかったのである。

昭和三十年頃、私達が学んだ頃の高校の日本史の教科書には、確か金沢文庫は「日本最初の図書館」と記述されていたが、平安時代には、京の都では撰閲家や公卿たちが「ふみくら」を造っていたことを伺い知ることができる。金沢文庫は武家文庫として造られたものであり、日本最初の図書館でもなく、仮に日本最初の図書館であったとしても、今日のように一般に公開されていたと理解することは困難である。

一方、鎌倉の長井氏や二階堂氏などの武家文庫は、大火、地震、兵乱等に遭遇して壊滅する。しかし、これとは対照的に金沢文庫の名は全国に知れわたるのである。来訪者の中には、卜部兼好という『徒然草』の

作者、兼好法師もその一人である。

鎌倉時代の文化に光彩を放つ金沢文庫は、鎌倉幕府滅亡によって主を失い、その後の歴史に大きく翻弄されることになる。金沢文庫本の流出は、鎌倉幕府滅亡直後から上杉憲実、戦国時代には上杉謙信（長尾景虎）、小田原北条氏などが持ち出したので、称名寺の金沢文庫本は減る一方だった。近世初頭になると徳川家康は大量の金沢文庫本を称名寺から江戸城内に運び込んだのである。家康が入手した金沢文庫本は、江戸幕府の蔵書の中核となった。事実、江戸城の紅葉山文庫に保管されていたものが、現在、内閣文庫本は国立公文書館や宮内庁書陵部に伝わっている。また家康の息子に分け与えられたものが、蓬左文庫（名古屋）など、徳川家三家の文庫に受け継がれている。

さらに江戸幕府に続いて称名寺から書物を持ち出したのは加賀の前田家である。加賀藩第五代当主・前田綱紀は、蔵書家として知られ、現在の尊経閣文庫の基礎を築いたのである。また同時期には水戸の徳川家も称名寺の蔵書に注目したが、水戸藩は『大日本史』の編纂の材料収集であったので、多量の写本を作成する

ことになり、称名寺から直接書物入手する必要はなかった。かくして江戸時代前半までに称名寺に伝来していた書物の大半は外部に流出してしまったのである。

■

それでは神奈川県立金沢文庫に収められている文化財の主力は、称名寺に伝来した古書・古文書・絵画・彫刻・工芸品などの文化財である。時代的には鎌倉中葉から南北朝時代にかけて、金沢氏一族や称名寺の学僧達の営々とした努力によって集積されたものである。他に類例を見ることのない、素性の確かな第一級の資料である。さらに郷土資料の収集により、金沢文庫が地域の歴史に目を据えて、博物館活動を進めるうえでの強力な武器である。勿論、神奈川県立金沢文庫は一度だけの観覧では理解できるものではなく、中世・鎌倉文化を実感していただくには、何度でも足を運んで下さることが必要である。是非あなたの生涯学習の場にしていただける魅力一杯の神奈川県立金沢文庫である。最後に、神奈川県立金沢文庫は中世・鎌倉文化の宝庫であり、博物館に図書館を併せ持った、我が職場を紹介した。

喉頭がんと闘い

岡原裕泰（柏原町）

父母すでに亡く、私も現世から左様ならする年が近いようです。

兄達も妹も、良い子に恵まれ、またその孫ときたら天下一品、最高の生い立ちを遂げてくれることでしよう。私はと言いますと、四人の孫をずっと身近に見守っています。

大酒飲み、これが仕事そのものみたいなマスコミ時代の、凝りない習性が私の喉を直撃しました。昨年五月初め、境内の清掃中、口内に生暖い物が満ちてくるのを感じ、落葉の山に吐いたのは真赤な血。

気管の入口左に直径2センチほどの腫瘍が見つかり、細胞の検査結果を待つまでもなく悪性と判断され、即手術、声も失うとの宣告。難病の告知をこともなげにする美人女医に、驚くでもなく、しばし呆然と対座していました。流れるような治療説明は、私を催眠に落

したように、ただ頷かせるだけでした。

手術に耐えられる体力があるのか、他への転位がないか、数日中に数々の検診を受け、患部は当初の所見部分のみ、声帯、肺、脳への転位は全く認められず、当面抗がん剤による治療が決定しました。抗がん剤は劇薬です。肝機能を最良の状態に保つことが私に求められる第一条件です。

「ガン」より前に酒。大好きな酒でしたが、殊勝にも禁酒、抗酒剤の助けも得ながら頑張りました。問題は煙草との戦いでした。粘膜への刺激度、これはすごい。全面禁煙出来ず、もらいタバコをやるのですが、これがやたら甘い。しかし後で喉が苦しい。宮司たちがとうとう鬼になって協力、私のいる前では吸わない、求めても施ささない、病気は他人の嗜好をも窮屈にしています。

しばし抗がん剤のみの治療でしたが、昨年九月、左上顎に豆つぶほどのシコリが発生。悪性との診断。抗がん剤に加えて放射線照射も加わりました。四十日に近い連続照射によく耐えたものです。味覚の変調、発声困難はもとより、不快な痛みを乗り越えた結果は、

気管入口の大腫瘍の消滅でした。

残るは左上顎のシコリのみ。数ヶ月、抗がん剤投与の様子を見ながら、医者はどうとう決断しました。シコリの切除、切除切開のついでに消滅した腫瘍跡を精密に検査するというものです。三月四日、五時間に及ぶ手術が無事終り、声を失うことなく今に至っております。

折々の記

井本義一（柏原町）

それぞれの人生には、あの時あの場での出会いの会があります。同窓会、同好会、本会のような同郷人の会、会社の同じ部店で働いた仲間の会、先輩の方には戦友会もあるでしょう。

私には同期入社の方があり、それは概して言えば高度成長時代の始まりから終焉までを、それぞれの持ち場で苦楽を共にしてきた、何でも話し合える、言わば

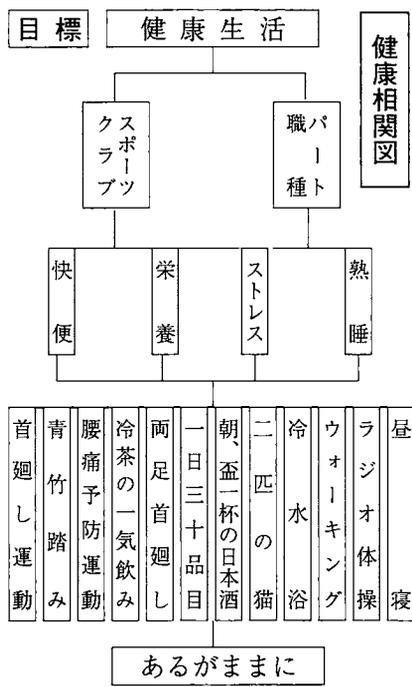
ます。

闘病中、自慢出来ることは、半月余りの手術入院の期間を除いて、神明奉仕を全うしたことです。精神文化の一端を担う者として当然といえれば当然ですが、若い先短い者の自惚れとお許し下さい。毎日、皆々様の弥栄を祈念しております。

裸で付き合える東京近辺の仲間が二三人おり、年一、二回集まりを持っています。その際、出欠ハガキにそれぞれの出欠に関係なく、全員が近況・心境を記入し、それを幹事が一覧メモとして、会計報告とともに全員にフィードバック（郵送）し、老いてますますその絆とお互いの健康を確かめています。

以下、近年の小生の近況、心境回答記録をそのまま掲げました。ご笑覧ください。

○昨年十一月より毎日が日曜日。生活にリズムを午前路上、午後スポーツクラブでの歩行各三〇分、夜はパソコンの運指練習。その他二匹の猫との共生によるストレスの解消を妻と共に。（12・2・17日）



健康相関図

○家事手伝いの雑用を含め、日常すべての動作の中で、喜んでこまめにリズムカルに、より多くの筋肉を動かすように努めています。(13・2・8日)

○下腹の皮下脂肪落としにウォーキング途中の児童公園で全身ひねり運動をしています。肩幅より左右一センチ位足を開き(つま先は閉じぎみに)腹から上半身をそり気味にして、両手のこぶしを背中の上下あちこちに当たるようにひねり回し叩きます。首も可能な限り左右に深く回すのと、ひねりに合わせて左右の腹を前に突き出すようにすれば、足首から

上へひねれます。(五〇〇回) 放屁音が出れば充分回転の証です。背中、後ろの腹まわりを叩くことにより内臓の活性化にも。出る腹との追いかけてっことをしています。(13・11・8日)

○「雀百まで踊り忘れず」色気としゃれっ気を忘れずに、考え方生き方はシンプルでありたいと思ってる昨今です。別途送付した生活習慣を変える健康相関図(別図参照) にかの参考になれば幸いです。(14・2・8日)

○NHKのラジオ深夜便(十月八日ごろ)で、血圧を測る前に大きく深く息を三回吐くことを二度するといい結果が出るとのことで実行するといひようです。(14・10・28日)

○毎日の励みごと(ウォーキング時に両手を振りながらの指で大きくグーチョキパーの励行、就寝前の青竹踏み六分間等)で、時にはするのが「嫌だな」と思うときの対応策として「楽しいな」と思うと乗り切れるようになった自分を、やっとなこここまでできたかと時空を超えて、先ず両親、妻、弟妹達やまわりのあらゆる人々に感謝と、改めていつまで続くか

判りませんが、褒めてやりたい気持ちの昨今です。

自称健康オタク、同インストラクターとして、今興味を持って精読している書籍の紹介です。既に読了の方にはご免！ 立川昭二著『養生訓に学ぶ』P H

P新書

(15・10・28日)

○ケイスケ(雄猫、サザンの桑田から娘が命名・雌猫

祝賀会に感謝を込めて

吉住 自由造 (春日町)

平成十六年六月十九日、学士会館に於いて、世話人二七名の方々のご尽力で「米寿・傘寿・ダイヤモンド婚を祝う会」を催して下さった。

私は、この三大祝事のほかに、自分史の上梓と、P H P文化フォーラム「埴生の宿」の十周年を加え、この五つの事柄が、期せずして同じ年に重なったことは、私にとっては生涯で最高の記念すべき年になった。



モアは没) や、ラジオ深夜便も含めて周りに支えられ、支えることが出来ることに感謝している今日この頃です。
“シンプルライフであるがままに”

(16・3・10日)

落花盛んの十六年四月十日 記

様々な分野でご指導いただいている方々、楽しい趣味の集いで一緒する同好の方々、なんでも心を許して話し合える友人等々、私の尊敬申し上げている方々が、一四二名様も一堂にご参集下さったこと、この日は私の生涯で最良の一日であった。

ご出席下さった一四二名の内、その八〇%の一〇〇名さまが、私が古稀を迎えてからお会いしご親交いただいている方々で、私と子か孫ほども年齢差のある紳士、淑女ばかりである。私はこの歳になって、人生の出会いの素晴らしさを痛感し、誇りに思っている。

関東氷上郷友会からは、渡辺会長、坂上、常岡両副会長をはじめ二六名の方々が出席して下さいました。準備

段階では渡辺会長から案内文を出していただいた。坂上様からは会員への呼びかけ、発送から当日の会場の準備、閉会のご挨拶までお世話になった。

当日は渡辺会長から主賓のご挨拶をいただき、村上久夫様、上野重喜様からもお言葉をいただきました。

そして二大歌手の登場である。足立さつきさんが郷友会や後援会の人達の声援を受け、名コンビの田中明子さんのピアノで、透明感に満ちた素晴らしい歌を歌って下さった。続いて天地総子さんが軽妙なトークと七



色の声でCMソング五〇曲その他を披露して下さいました。その他菅原さんのお祝いマジック。斉藤さんのハーモニカ演奏でステージを飾って下さった。

ご挨拶いただいた各界の諸先生、それぞれの持ち場を分担していただいた世話人の方々

に心から感謝している。そして締めくくりはテーマ曲「殖生の宿」を足立洋子さんのピアノで、全員で合唱していただき、心の洗われるような感動の一瞬であった。

私は丹波の山奥から、三等切符の各駅停車に乗って、いまようやく私の大好きな終着駅赤レンガの東京駅に着いた。しかし、これで私の人生が終わったわけではない。これから引込線に入って、走り続けてきた自分を、どのように軌道修正すべきかを考えてみたい。

そして私は、もう少しこの世に逗留し、十一年後には、私の白寿、妻の卒寿に皆様と再会することを今から楽しみにしている。

私は、この記念すべき年に当り、自叙伝『自由造の各駅停車でありがとう』を出版し、当日出席の皆様にお贈りした。拙文のお粗末な内容だが、精いっぱい生きてきた証として書かせていただいた。

当日の、終生忘れることのないこの感動を心の支えとして、残り少ない人生を生きていきたい。

関東氷上郷友会の皆様、ほんとうに有り難うございました。

二〇数年前、山崎豊子原作で田宮二郎演じる「白い巨塔」が放映されました。医学部の教授選挙や医局とは、本当にこんなのだらうか……?と想像しながら、興味津々で見ていた浪人時代を思い出しました。

そんな時、今年（二〇〇四年）唐沢寿明版「白い巨塔」が話題になり、中学・高校の息子達が真剣に見ながら、「大病院ってあんなの?」と聞いてきました。

私が順天堂大学医学部眼科の医

局に入局した約二〇年前と比べ、

「白い巨塔」の描写は極端すぎる嫌いはありますが、当たらずも遠からずの印象がありました。しかし、今の医局は他の分野と同様、昔と比べ民主的で風通しも良くなり変わりつつあると感じています。

また、医学の領域もご存知の通り日進月歩で、特に専門とする眼科の分野においては、私が眼科医になる数年前から他の科と比べても格段に変化、進歩してきました。特に白内障（カメラというレンズ

に相当する水晶体が白濁する病気）の手術治療においては、周辺器械や人工水晶体等の発達により、その治療成績は飛躍的に向上し、多くの白内障患者さんがその視力障害から開放されました。一週間絶対安静、一ヶ月間の入院が必要だった手術も日帰りのできるほど安全性が高くなりました。

さらに皆様の善意に支えられているアイバンク事業も充実し、角膜移植により視力を回復された方も沢山いらっしゃいます。最近では、近視もレーザーにより治療可能になりつつあります。（近視の原因、予防は未だに不明ですが……）

しかし、その反面急増している糖尿病から、糖尿病網膜症（眼底出血）や黄斑症などの眼の合併症により、多くの患者さんが中途失明されています。また、原因不明

私の職場

心の通う信頼の医療めざし

開院五年「あだち眼科」

足立和孝（氷上町）

の加齢黄斑変性症（中心が見えなくなる）や緑内障（視野が狭くなる）の治療の遅れなどでも、失明される方が後を断ちません。多くの難問を抱えています。我々を含め日々その解決に向け多くの人たちが努力しています。

○ 約三〇年前、私の郷里水上町の眼科医院といえば石生駅近くの赤池眼科だけでした。私も高校生まで近視、結膜炎、角膜外傷などの治療を受け、大変お世話になり感



謝しています。先生は小柄な厳しい女医さんで今でもよく思い出しますが、数年後、眼科医療の中心で先駆的であった順天堂大学の研究や診療に触れた時、田舎の医療は大変遅れていると感じました。

その頃は、今ほどビデオやインターネットが発達しておらず、情報の伝達速度が格別に遅いことを考えれば致し方なかったと思います。その時、田舎にいながらにして、田舎の人にも大病院と同レベルの高度な医療を提供したいと考ええるようになりました。

そして約一五年間在籍した大病院の勤務に区切りをつけ、縁あって水上町よりは都会ですが、田舎の埼玉県加須市（東北自動車道に加須インターがあります）に、一九九九年八月に「あだち眼科」を開業しました。開業当初は七名の

スタッフでスタートしましたが、現在では眼科クリニックとしては中規模以上の診療所となり、年間約四〇〇名前後の手術患者さんと、一日約一八〇名（二、三〇名の患者さんが来院され、少しづつ地域の方に信頼されつつあると感じております。心の通う信頼される医療の提供、最新の医療の提供、喜びと安心の医療の提供を当院の医療理念として、スタッフと共に力を合わせ地域医療や福祉の向上に微力ながら貢献して行きたいと考えております。

○ 「名医たるより良医たれ」という母校順天堂大学の教えのもと、多くの良医を知っております。眼科に限らず各種医療機関の情報をご希望の方、少しはお役に立てるかと思っております。是非ご連絡下さい。

船出した「丹波市」

足立智和

(丹波新聞社記者)

「平成の大合併」により、氷上郡六町が合併し、十一月一日に丹波市が発足しました。丹波市の面積は、四百九十三平方キロメートル、人口は七万二千八百六十二人（二〇〇〇年国勢調査）。面積は、神戸市に次いで県下二番目、人口は十四番目になります。来年四月に豊岡市など一市五町が合併し「豊岡市」になり、宍粟郡も「宍粟市」になります。その時点では、面積は三番目、人口は十五番目になる見通しです。

近く、初代市長、市議のダブル選挙が行なわれます。市長選には、前氷上郡教育委員会教育長の辻重五郎氏が立候補しました。現職の六町長は、そろって不出馬ということになりそうです。定数三十の市議選には、四十人程度が立候補するものと見られます。

す。二十五ある小学校区から議員を出そうと、小学校区（旧村）を単位としたムラ型選挙の色合いが強まっています。

丹波市はさまざまな課題を抱えています。最大の課題は、人口減少、高齢化への歯止めの対応と、スケールメリットをいかした行財政改革と言えるでしょう。

丹波市固有の課題では、▽平成二十二年までと、期限が決まっている丹波市全体の可燃ごみ処理場の建設▽救急体制の格差是正のための救急駐在署整備、春日、市島方面で急患に対応できる医療体制の整備▽JR福知山線の複線電化▽料金、水質とも旧町で異なっている上水道の整備などがあります。

また、旧氷上町庁舎を市庁舎に、旧春日町庁舎を分庁舎として発足しましたが、新市庁舎の建設を望む声もあり、新市長誕生後、委員会を設置し、検討が行なわれます。柏原、山南、青垣、市島町役場は、支所となり、職員が大幅に減り、空きスペースが目立っています。救急分駐署に改造したり、民間業者やNPO、市民グループに貸し出すなど有効利用の



新市庁舎になった旧氷上町庁舎

手立てをあわせて考えていかねばなりません。

丹波市の正職員数は、約八百二十人。支所には、防災や交通安全などを担当する「庶務係」、戸籍事務や埋葬・火葬許可、ごみ袋の販売などを行なう「生活環境係」、福祉、介護、医療などの業務する「健康福祉係」、農林・商工団体との調整や、建設に

関することを受け持つ「業務管理係」の四係が置かれました。支所の正職員数は柏原が二十四人、青垣が二十六人、山南と市島が二十七人になっています。また、臨時職員と非常勤職員約五百人を、合併後も継続雇用

しており、合併と同時の行政改革は、ほとんどできていない状況で、市長誕生後、厳しい「改革」が進められることでしょう。

氷上郡六町の合併協議では、町によって開きが大きい料金や、補助制度は、「五年以内」「三年以内」などと、時間をかけて調整することで合意したものが多くあります。「平成十六年度は現状のまま」とし、新年度が始まる「平成十七年四月一日」に調整するものもあり、合併した極端に負担とサービスが大きく変わったという部分というのは、そう多くはありません。

合併に際し、篠山市（多紀郡）が「サービスは高く、負担は少なく」という考え方をしたのに対し、丹波市（氷上郡）は、「応分の負担を求めるとの方針を打ち出し、「サービスが上がるものもあれば、下がるものもある。負担が増えるものがあれば、減るものもある」と、住民にも痛みを共有してもらおうという考えを貫いています。負担が増えるのは仕方がないことかもしれませんが、住民の側に痛みが偏重するようなやり方では、理解が得られません。合

併により肥大化した職員数の是正など、分かりやすい形で行政側の痛みが、住民に提示されることが望まれます。

丹波市のまちづくりは、合併協議会がまとめた「新市建設計画」にそって進められます。主要施策をいくつか見てみると、▽福祉機能の充実▽高齢者支援の充実▽医療救急体制の充実▽コミュニティバス、福祉バスの整備▽情報通信基盤の整備▽地場産業、観光資源の連携▽市民参画のまちづくりの推進などがあげられています。ただ、具体的な施策の記載はなく、考え方を示したものといえるでしょう。

合併特例債の活用により、多紀郡合併のきつかけとなった「広域斎場」「県営水道の導入」「可燃ごみ処理場」の三大課題を克服し、さらにチルドレンズ・ミュージアム、今田温泉、西紀温水プールなどと、旧町の「夢」までもかなえた篠山市に対し、丹波市では、現在のところ、合併の目玉となるようなハコモノは見当たりません。水上郡六町は、ハード面では、あらかた大事業を片付けており、町としての欲

望がある意味発散して、借金を抱えて合併しました。負債は五百億円を超えます。丹波市の方が大きいとは言え、合併後、あれだけの大事業を行なった篠山市と、特例債を使う前の丹波市の借金額がほぼ同じであることを、認識しなければなりません。

合併しただけでは、行財政改革も財政基盤の強化も限定的で、ひっぱくした財政の建て直しには、ほとんど効果がありません。旧町時代に約束していた事業も、実施年度が送れたり、計画そのものがなかったことになるかもしれません。ただ、合併をせずに、町のままであっても、同じ状況を招いたことは、疑う余地がありません。

もはや「あれも、これも」は、あり得ない。「あれか、これか」の選択の時代を迎えています。水上郡合併、丹波市の誕生を、叫ばれて久しい「協働参画」を実りあるものに変えるきつかけにすることが求められます。丹波市のまちづくりの成否は、「主体的に関わり、関わったことに対して責任を持ち、そして痛みを受容する」という市民意識の芽生え、醸成にかかっていると云えるでしょう。

伊能忠敬の測量の新
文書発見

青垣町

青垣町佐治の足立澄子さん
宅から、伊能忠敬が調査に訪

れた際に氷上郡が負担した費用などを記した古文書が見つかった。墨で和紙に描かれた、忠敬を表わす「天文方」などの文字が鮮やかに残っているほか、氷上郡内の石高などが記されている。専門家によると、同様の古文書はこれまで氷上郡内では見つかっておらず、当時の様子を知る上で極めて貴重な資料だという。

一九九七年に亡くなった夫の興平さんと「院殿号」を持つ祖先らの墓を新しくするのにあたり、家の歴史を正確に調べようと、代々伝わる大量の古文書の解読を、町内の郷土史研究家・芦田輝夫さんに依頼した。この中に、伊能忠敬の一行十八人が、文化十一

年（二八一四年）に現在の市島町や春日町など、氷上郡内を測量した際にかかった費用の分量を記した文書が見つかった。

文書には、「郡中高メ（しめて）六万式（に）千七百拾五石五斗三升」とする氷上郡の石高と、足立さんの先祖が庄屋を務めていた「寺内村」の負担金、「宿九ヶ所」「御昼休八ヶ所」などの忠敬の足跡が記されている。

（平16・3・18日付）

氷上郡内の百歳以上
の高齢者は17人

氷上郡

兵庫県柏原健康福祉事務所の発表によると、氷上郡内での百歳以上の高齢者は男性一人、女性十五人（九月末時点）。最高齢者は氷上町の足立ふみさんの百三歳。

（平16・9・9日付）

本材加工品や端材など
直売所「山の駅」

氷上町

氷上町森林組合（芦田重治組合長）は同町上新庄が九日、本材の加工品や端材などを販売する直売所「山の駅」を開設した。間ばつなど、山の手入れに伴う補助金に依存するだけでなく、新たな収入源にしようというねらい。今



後、地元のコマや野菜なども販売するほか、将来的には山菜などの生産、販売を目指す。

（平16・8・12日付）

葬祭事業に続々、当
家や近所の負担軽減

丹波地域

丹波地域で、新たに葬祭事業に乗り出したり、葬祭会館をオープンする事業所が相次いでいる。今後、会館建設を予定している事業所もあり、既存の業者や新規事業所間での競合が予想される。高齢化が進む地域で、家の構造や葬儀に対する考え方の変化もあり、葬儀も多様化の時代を迎えたようだ。氷上郡、篠山市とも、組合員の生活改善事業として取り組んでいるのはJAが最大手だが、ギフト商品の「ルネーナ」や「森田石材店」など異業種も乗り出す。

（平16・8・12日付）

丹波の峠

丹波を撮る

郡境の峠：栗柄峠

栗柄峠は片峠である。春日町栢野から標高差100mも上った高地に旧多紀郡西紀町（現在篠山市）栗柄の里がある。ここにも谷中分水界があり、加古川水系と由良川水系の流れがニアミスしている。

春日町栢野から篠山市へ



篠山市栗柄から春日町へ



栗柄部落の風景。手前道路沿いの流れは宮田川→篠山川→加古川となるが、前方田畑の水は栢野へ流れ落ち竹田川→由良川となる。

丹波 を撮る

撮影：徳田八郎衛

鐘が坂峠

鐘が坂峠も片峠である。柏原町上小倉から標高差100mほど上った多紀高地に旧多紀郡丹南町（現在は篠山市）追入（おいれ）の里がある。かつては峠であったが明治・昭和・平成と三度もトンネルが新設され、ドライバーからは峠という感覚が消滅しそうである。



上小倉の谷と旧道

第1代の旧トンネル（隧道）へ
上っていく旧道

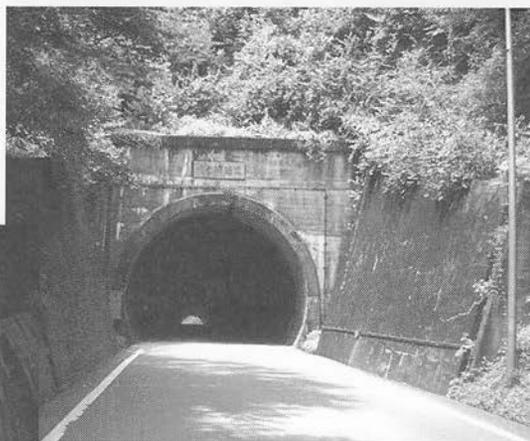


間もなく使命を終える第2代トン
ネル（柏原側）

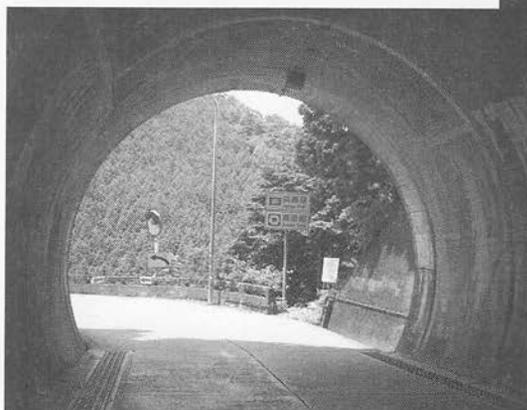
丹波 を撮る

穴裏峠（トンネル）

青垣町東芦田と福知山市奥榎原とを結ぶ穴裏峠が恐ろしい難所であると伝えられるのは、福知山側のヘアピンカーブの多さと、トンネルを東芦田側へ出たところで待ち構える、この直角カーブのためであろうか。



奥榎原側出口



東芦田側出口（ここが県境）



東芦田側出口の直角カーブ

丹波 を撮る

風台風の爪あと

平成16年8月30日夜、台風16号は氷上郡に大きな風水害を与えた。ここに掲げる写真は、その爪あとのごく一部である。



氷上町本郷の諏訪神社。倒れた稲が伏し拝んでいるように見える。



すでに片付けられているが、ご神木の檜の木が折れ、拝殿が本殿にもたれかかっているのを正面からワイヤーで支えている。



倒れた稲はコンバインではうまく刈り取れず、家族動員の手刈で対処する（前方の木立は諏訪神社）

一 中学生の大東亜戦争

児 玉 安 正

(山南町)



私は昭和十七年四月、歴史ある旧制柏原中学に入學した。大東亜戦争が始まって三ヶ月経過した時期で、緒戦の輝かしい戦果の余韻が残っており、前途は大いに希望が持てた。

海軍兵学校志望であった。この夏、岩田豊雄（獅子文六）が朝日新聞に連載した小説「海軍」が好評で、江田島に憧れる少年達の夢を大きく膨らませていた。

当時、天平の聖代をこほる万葉の歌「御民われ生けるよとし驗あり天地の栄ゆる時に遇へらく思へば」に曲が出来、私達も同じく栄ゆる御代に生まれ合わせたことの喜びを素直に歌った。

校長は柏中三回卒業の植木孝之助先生で、広く敬慕

の的であった。クラスは前年よりABCの三組、クラス五十五名の編成であった。学年主任は山本求先生（図画・習字）、江戸っ子弁で小柄ながらエネルギーで、厳しい指導ながら、チャイナの愛称で親しまれていた。A組は吉野先生（地理・歴史）、B組は野崎先生（農業）、C組は伴野国重先生（柔道・漢文・作文）が担任で、私はB組であった。

最初の授業は正司先生の国語で、岩波の教科書「生きた言葉」から始まった。荻田庄五郎先生の英語リダーは愛称ウルフのように厳しく緊張感のある授業だった。先生は三年になると、有志に英文解釈の添削指導をして下さった。詩人シェリーの研究者として知られ、後年母校の関西学院大学教授に迎えられた。英作文の梅田先生のみわかりやすい英字。数学は竹中先生の代数と吉田先生の幾何。旧上久下村の住職、葛谷俊道先生の修身、新進気鋭の松尾先生の体操、剣道。柔道では伴野先生が最初に荘重な声で「武」とは戈こ武器を止めるにあり、むやみに戦うものではなく、戦わないのが「武」の理想だと説かれた。私には今も記憶に残る訓おしえである。

こうして戦時の中学生生活が始まった。戦時の特色として、一、軍事教練 二、体力養成 三、勤労働員が挙げられる。

一、軍事教練とは軍（陸軍）が教官として将校を配属して、軍隊さながらの訓練を行うもので、柏中では井上退役陸軍中尉（愛称・まんちゃん）がこれを補助していた。夏になると、全校生徒による夜間行軍があった。上級生は執銃、携剣の武装で、明け方まで行う夜間の進軍練習である。この時ばかりは短い夏の夜も長く感じられた。

二、体力養成、(1)日常では昼休み終了後、全員上半身裸で校庭に集合。上級生指揮のもとタワシで乾布摩擦を行い、身体を鍛え、質実剛健の気風を養った。(2)年中行事として運動会のほか、四月二十六日の創立記念日にはマラソン大会が行われ、下級生は三千メートル、上級生は五千メートルを走り抜いた。(3)「国の制度として「体力検定」があった。走る、跳ぶ、投げる、担ぐ（米俵）等の基礎体力を測定するもので、全種目合格者には、成績により金銀銅何れかのバッチが与えられた。金バッチをつけた上級生は特

に遅しく、頼もしく見えた。

三、勤労働員、春・秋の農繁期に通学区単位で数班に分かれ、農家の応援に行った。春は麦刈り、秋は稲刈りが主だった。東京に生まれ育った私（昭和十五年、父死亡により母の実家のある山南町に移住）には慣れない仕事で、皆に迷惑かけないよう頑張ったが、刈り入れ作業では引き離されるケースが多かった。この勤労作業は、普段近寄り難い上級生に親しく接する絶好の場であった。休憩の合い間に学園生活の参考になる事柄、諸先生のこと、教科書のやま、通学区自治の団歌、応援歌（戦時中は公式には歌われなかった）等々を教わって、柏中生として中味が濃くなった感じがした。

だが、こうした学園生活すら昭和十九年三学年一学期までしか出来なかった。

昭和十七年六月の空母四隻を失ったミッドウェイ海戦を境に戦局は転機を迎える。拡大した戦線は体勢を立て直した敵の物量を伴う強烈な反抗を受け、各地で苦戦。精鋭日本軍も補給が続かず撤退（十八年二月、ガダルカナル島、同五月二十九日、アッツ島玉砕）を

余儀なくされる。山本連合艦隊司令長官が戦死したのもこの時期だった（十八年四月）。

十八年十月には、とうとう文科系学生の徴兵猶予が解かれ、雨の神宮外苑競技場で出陣学徒壮行大会が行われ、学業半ばで戦陣に馳せる学徒の勇姿を新聞、ニュース映画が大々的に報道した。前後して学校でも予科練合格者の壮行会が校庭で行われた。

昭和十九年六月になると戦局は急転する。ヨーロッパでは連合軍、ノルマンディー上陸。太平洋では国防上絶対譲れぬ、絶対防衛線の上のマリアナ海域に米軍侵攻。十五日サイパン島に上陸。続くマリアナ沖海戦で日本海軍は空母、航空機の大半を失う（ミッドウェー海戦以後、軍は敗北の事実を国民に知らせなかった）。ここで、ようやく学徒勤労動員通年実施の閣議決定が発動され、学徒は一斉に軍需工場等に駆り出されることになった。（国民学校初等科の集団疎開もこの時期）

柏中では四・五年生は西宮の鐘淵の工場に、三年生は尼崎の大日電線（現在の三菱電線）に決まり、七月初めに出発。ここには篠山高等女学校四年生、大阪の女子大生も動員されていた。私は数人の仲間と撚線と

いう数本の電線を撚り合わせ、太い電線にする部署に配属された。動員されて間もない七日にサイパン島陥落、三万人の将兵玉砕。この島には多くの邦人が軍に協力していたので、悲劇は大きかった。岬から身投げする婦人達をカメラが捉え報道した。

遂に東条内閣総辞職、小磯内閣成立。十月になると戦場はフィリピンに移ってゆく。米軍レイテ島上陸。続くレイテ沖海戦で日本は連合艦隊の主力を失う。神風特別攻撃隊が結成され、敵艦に戦闘機ごと体当たりし、若い生命が次々と南の海に消えていった。

このさ中、海軍は翌年四月開校の兵学校予科の生徒募集を発表する。私は直ちに応募、十二月江田島での二次試験で右耳の疾患が見つかり、念願の海軍士官の夢は惜しくも絶たれた。誠に残念だった。

絶対防衛線を突破し、マリアナ基地を整備した敵は、昭和二十年一月ルソン島上陸を皮切りに日本本土を目指して激しく侵攻する。中でも硫黄島の攻防戦は凄まじく、攻撃軍の死傷が防衛軍を上回る程で日本軍はよく奮闘したが、遂に力尽き三月十七日玉砕。

一方、空からの攻撃も激化してくる。三月九〜十日

の東京大空襲、十三、十四日大阪、十九日阪神、瀬戸内海、九州の一部、等々主要都市への空襲は熾烈を極め、次第に国土が焦土となっていった。

この空襲で、私達C組生徒の寄宿舎も全焼。勤務中だったので幸運にも生命だけは助かった。直ぐに五十名を収容する施設は見当たらず、C組は自宅待機を余儀なくされた。

戦時特例により、四年生も卒業していく。四月からは全学徒総動員で食糧増産、軍需生産、研究開発等に挺身させるため、授業は一年間停止となった。

戦況はさらに悪化する。四月一日米軍、沖繩本島上陸。男女中等学生を含む県民が義勇隊として動員され、一丸となって必死に戦った。程なく小磯内閣総辞職。天皇の信認厚い鈴木貫太郎海軍大将の内閣が成立する。軍は年初、本土決戦を決意して準備を進め、この時期最後の勝利を訴え続けた。五月、同盟国ドイツが連合国に対し無条件降伏。六月二十三日、遂に沖繩陥落。県民も集団自決し、悲壮の極み尽きなかった。

学校からは未だに連絡がなく、ジリジリとして待つ。七月二十六日、連合国ポツダム宣言発表。政府はこ

れを黙殺。その後ようやく通知が来て、学校に工場疎開していた東洋ベアリング（現在のNTN）のため土木作業（校庭の裏の崖掘りとその土砂の運搬）を行うことになった。

八月、戦争は末期を迎える。六日米軍広島に原爆投下。八日ソ連対日参戦。九日長崎に原爆投下。そして遂にその日がやって来た。

十五日聖断、玉音放送で戦争終結。その日は朝から暑かった。昼食後ベンチでうとうととしていた時知らされた。皆、表面は平静であった。このあと予定通り作業をこなし、帰宅した。即日、鈴木内閣総辞職。十七日東久邇宮稔彦内閣成立。

二十五日、学校の授業再開。しかし教科書はそのまま使用できず、削除、抹消、修正を要するものが多かった。武道は禁止。校庭で一斉に行った例の乾布摩擦も復活しなかった。秋になると軍からの復学、都会の疎開者で生徒の数が増えて来た。（入学時に比べ、卒業時は三十数名の増加）

敗戦で価値観が百八十度変わり、私達の周囲は当初戸惑いながら、誰もが将来を真剣に模索した。誰もが

夢を諦めなかった。次第に教室に英単語の本やカードを持参する者が目立つようになり、彼等は競ってポキヤブラリーを増やしていった。

かくして戦争は終わった。青春多感な時代を戦争と共に歩み、精一杯生きた。ひたすらお国の勝利を信じ、「欲しがりません、勝つまでは」と厳しい耐乏生活に甘んじた。だが戦後も続く食糧不足だけは辛かった。一日一人当たり二合三勺の主食の配給では伸び盛りの旺盛な食欲を充たすには至らなかった。ひもじい成長期であった。非農家はどこでも食糧調達・確保に悩まされ、並々ならぬ苦勞をした。この時の親類、知人の厚意は非常に有り難かった。この恩義は六十年経った今も忘れられない。

徹底した節約を強いられた耐乏生活のお陰で、自然に我慢・辛抱・忍耐・節約（例えば弁当箱についての飯粒でも残さず食べる）が習性になった。この習性こそは戦争体験世代を特徴づける美德で、戦後の復興にも大いに寄与したと思う。

（参照）岩波ブックレット『年表・昭和史』

木俣 修著『万葉集時代と作品』

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがり、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東水上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますようお願いいたします。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、『丹波のきずな』の強さを思います。

（山ざる編集部）

Xに交わる郷里の街道

徳田 八郎衛

(柏原町)

ここ十年ほど、本誌の編集を手伝わせて頂いていますが、郷里を想う寄稿文で昔も今も変わらないのが、「有為の人材を輩出し歴史遺産にも富んだ郷里なのに、これほど氷上郡の知名度が低いとは！」という嘆きです。年配者となると、もう慨嘆を超越して諦め気味。

〇〇歳にして天命を知る？ 今やヤングも同傾向です。愚息の職場での先輩が「出身は神戸のチョットと北です」というので、宝塚か小野あたりだろうと推定していたら、市島町北奥の「案山子祭り」を小生と一緒に撮影した写真を見せた途端、先輩殿は「アッ、ぼくの村だ」「それなら神戸から、かなり北じゃないですか」というと、「大阪ならともかく東京では、著名な宝塚や篠山でも場所は正しく知られていないよ。もう諦めて『神戸のチョットと北』で通っています」

かくて、その先輩殿が小生の柏原高校後輩で、かつ天文班後輩ということまで判明しましたが、小生には最近の若い郷友が郷里のPRにさほど熱心でないのが残念でした。もちろん個人差は大きいのですが……。

小生などは郷里を離れるや、京都でも東京でも「我が郷里には、わずか海拔九五メートルの中央分水界最低の峠(?)があり、日本海側にしか生息しない魚が、ここでは瀬戸内海水系にも見られません。水分れ橋という橋に降った雨水は、下の川へ落ちれば瀬戸内海へ流れるが、北詰まで流れたら日本海へ運ばれます」と水分れ橋から説き起こし、次に「台湾総督・田健次郎、最後の海軍軍令部次長・大西瀧治郎、十一年間も日本女子大学長だった井上 秀、戦後では日本物理学会会長・小谷正雄などは、すべて我が郷里の大先輩です」と人物史へ移りました。

ああ、星霜移り人は去り、最近は新聞記者や雑誌編集長でも、これら尊敬すべき諸先輩の御名を知る人はほとんどいません。だが最近の若い人、といっても三十代、四十代ですが、歴史には興味がなくても交通や流通への関心は高いのです。

そこで、せっかくの地形学や動物生態学の醍醐味には触れないようにしながら、「峠らしい峠を一つも越さないで太平洋から日本海へ走れる国道があるのですよ」というと、多くの人が「へエー」と身を乗り出してくれます。東日本の人は急峻な骨梁山脈の実態を知っているから、「ウソでしょう」と叫ぶ人もいます。「ホンマです。私の自宅から五百メートルほどの所を明石と舞鶴を結ぶ国道一七五号線が……」と説明し、平坦なフロリダ半島でなら最高峰となる高さの海拔九五メートルの峠(?)を運転手が気付かないまま通過する、という話につなぎます。

ここまでは国道一七五号線だけの話ですが、中央分水界にありながら、氷上郡が低い位置にあるのを十分理解してもらえます。「大阪から山陰地方へ向かうトラックだって、こんな低い分水界を利用しない手はないでしょう」といえば、聞き手はこれも納得。そして声を張り上げ、「二つの重要な街道がXの形で交わる氷上郡の中心に、私の育った母坪^{ハハバ}という部落があるのです!」。ナンダ、それが言いたかったのか、と笑いで出す人が大半ですが、それでもいいのです。氷上郡

のユニークさ、その中心部の母坪という、これも変わった地名の部落のユニークさを知ってもらったのだから。歴史に興味のある人だと、交通の要所なるが故に生じた事件や遺産について質問してきます。神代に近い昔、丹波地方を制圧した大和の勢力が、福知山北部にある元伊勢さんの御霊を、大和の勢力が今の伊勢神宮へ運ぶ際に氷上郡の神社で一泊したという伝説、大阪から手代と駆け落ちしてきた、おさんが捕まったのもXの交点に近い森であったという事実を述べますが、一番自信を持って語れるのは、やはり自分の目で確認したものです。

現在のバイパスが形成するX交点横の大型スーパー裏には柏原川にかかる橋がありますが、かつては、その、やや上流に「北口の橋」がありました。そこに置かれた石の道標には、石生あるいは川沿いに柏原の方から来た旅人のために、「右たじま、左はりま」と記されていました。まさにXの交点です。

「左はりま」の道は、土手から下って母坪の集落へ入り、母坪(稻継)城址と妙見宮との間の一番低い坂を越えて稲畑経由で播磨へ向かっていました。明治中



期に鉄道が開通して、多くの道路が郡の中心地である石生駅から放射状に整備され、自動車普及し始めた昭和初期には八丁（繩手）や十六丁（繩手）が直線の県道として整備されたため、西脇からの旅人は母坪城跡北端から横田へ、柏原からの旅人は石生・横田經由で佐治へ向かうようになりましたが、それまでは、鐘が坂を越えてきた旅人は最短距離の柏原川と佐治川の

土手沿いに但馬へ向かったと聞いています。

思えば、明治初期の町村合併の際、歴史的に付き合いの深かった稲継や本郷、横田という集落が構成する本郷村ではなく、新井村に所属することになったため、「役場から一番遠く離れた、一番小さい部落」の悲哀を八十年ほど味わってきたの

が、この母坪でした。歴史を誇る新井神社の大祭があつても母坪だけが氏子でないので。子供心にも寂しいものでした。こちらは旧沼貫村新郷にある伊尼神社いちのみやの氏子で、明治初期の子供は稲畑の小学校へ通ったそうです。そして次には柏原町と合併したから、さあ大変。役場は数キロも先となりました。合併前の「巡回バスを出すから」という甘い話は、合併が終わればどこへやら。一番困ったのは、せっかく速達が柏原郵便局へ到着しても「局から五キロ以上あるから」という理由で配達されないことでした。「徳川時代の道」で柏原川沿いに来れば五キロはないし、石生局扱いなら「昭和の道」を迂回してきても三キロ足らずなのに。

だが、交通手段と道路網の変化が村落に与える影響は恐ろしいもので、柏原町の北端、「柏原町の稚内？」であった我が部落は、丹波市の発足を待たずして氷上郡中心の一部となりました。

母坪・横田・稲継・本郷・田路の境界が判らないほどギッシリと大型店舗や公的機関が並んでいます、篠山市・氷上郡を通じて商業地最高地価の地点は、何と母坪区域にあるのです。

ウィーン美術史美術館と

オーストリア絵画館を訪ねて

生田 清弘

(柏原町)

二〇〇三(平成一五)年一〇月、ウィーンを訪れた。市街の中心部を囲むように「リング」と呼ばれる環状通りが走り、この道に沿ってウィーン国立歌劇場、王宮、国会議事堂、市庁舎、ウィーン大学などの建物が並ぶ中に、自然史博物館と向き合う形で、重厚な姿の美術史美術館がある。

この建物は一八八〇年に完成したが、ヨーロッパ屈指の美術館に相応しい内装と設備を充足するため、さらに一年の歳



美術史美術館の夜景(手前はマリア・テレジアの像)

月をかけ一八九一年の開館となった。

八〇〇〇点の絵画をはじめエジプト、古代ギリシア・ローマから一八世紀に至る彫刻や工芸品などの夥しいコレクションが収納されている。これら美術品の収集はハプスブルク家歴代のおよそ四〇〇年にわたる熱意の結晶ともいえるべきもので、皇室コレクションとして有名。正面階段を上って、まずブリュエゲルの作品が並ぶ展示室に直行。ここにも世界最多のブリュエゲル・コレクションはルドルフ二世らによるもので、この美術館の至宝と言われ、今までもレーザー・ディスクや写真などで何度も見ているが、さすがに実画の迫力にはいたく感動した。



「雪中の狩人」ブリュエゲル

「雪中の狩人」(冬)

や「牛の群れの帰り」

(秋)などの月曆画(カレンダー)をはじめ、一

六世紀の自然の情景と農

民たちの生活を描いた名

作、「農民の結婚式」・

「農民の踊り」や、寓話

を描いた「バベルの塔」などを見てまわる。

「雪中の狩人」は典型的な月曆画とされ、——日本画の大家・東山魁夷画伯が、かつて『ウィーン美術史美術館で最も観るべき作品は「雪中の狩人」で、彼は構図の天才だ』と言った程だ。——（魅惑のプラハ・ウィーン・ブタベストリートラベルジャーナルより）

ピーテル・ブリューゲルの月曆画は、伝統を尊重しながらも風景は実際の地形の再現ではなく、山・谷・



「農民の結婚式」 ブリューゲル

海・川・町などの一般的な構成要素を組み合わせることで、そのムード全体と新たな空間と時を生み、新しい世界を導き出すという独特の絵画である。やはり構図の天才か。「農民の結婚式」は、オランダ一六世紀の慣習による裕福な農民の結婚式

情景を描いたもの。正面奥の垂れ幕にかかった冠の下にいるのが花嫁、肘かけ椅子に掛けているのが公証人で結婚証書を作成する役、上座に座っているのはスペイン風の装いの地主だという。花婿の姿はないが、見当たらない理由には諸説があり、その一つが式の夜までは一緒になってはいけない風習があるからとか。

ブリューゲル作品から受ける鮮やかな色合いの自然の姿と、画面に登場する多くの人物の活気溢れる動作の一つ一つが納得のいくものであり、個性的な農民画家としての名声を高めた所以でもあり、見る人々の心を惹き付けずにはおかない。そして通説にもなっている「はるばるウィーンにやって来た甲斐があった」という感想を抱く。一番見たいものを真っ先に済ませた安堵からか、次の部屋への足どりも軽やかになり、時間的な余裕も出てきたようだ。

ピーテル・パウル・ルーベンスの展示では「毛皮のコートをまとったエレヌ・フルマン」や「自画像」を見る。「毛皮のコート」はウィーンの絵画の中でも肖像と神話的戯作の最も不思議な組み合わせと言われるもの。古代のヴィーナスブディカが、ここではエレ

ヌ・フルマンの特徴を与えられているのか、ルーベンスが彼の妻の肖像画を神話的に描いたものかはつきりしないが、ルーベンスの遺言によりエレエヌ・フルマンに残されたものが後にウィーンの皇室コレクションになったという。「自画像」は、かつてのものとは別の親しみのある初老の風貌を感じさせる作品だ。

レンブラント・ファン・レインの部屋に入ると、数点の肖像画に出会う。それらは「大自画像」、「女予言者のような画家の母親」、「読書する画家の息子」などである。「大自画像」はその服装からも彼の財政が困窮し始めた頃の作品らしいが、服装はスモック（画家の仕事着）ながら、正面を向き自信に満ちた容貌だ。「画家の母親」はレンブラントの母親が亡くなる一年前（七一歳）のもので、ユダヤ教の祈祷スカーフをかぶって、ルカによる福音書の中の女預言者ハンナのよな姿をしている。「画家の息子」は名をティトゥス・ファン・レインと言い、レンブラントと彼の最初の妻との間の四番目の子供として生まれ、ただ一人成長した子供だったという。

作品はいずれも実に巧みに描かれていて、レンブラ

ントの作品を見るたびにいつも時間をかけてしまいが、見つめているうちに親しみが湧き、人の生涯や運命みたいなものを感じるのは、それだけ魅力ある作品だからだと思う。

ヨハネス・フェルメールの作品は数少ないことで知られているが、ここにも貴重な一点があった。「アトリエの画家」、「絵画芸術の寓意」は寓意におけるいくつもの意味が複雑に重なり合っているという。

因みに寓意とは「他の物事にかこつけて、それとなくある意味をほのめかすこと」。歴史の女神（ミューズ）クレイオが画家のモデルとしてポーズをとっている。画面にみる論文、マスク、スケッチブック、オランダの地図なども

寓意の対象となる

といい、女神は画家にインスピレーションを与え、同

時に旧オランダに

おける絵画芸術の名声を宣言してい



「アトリエの画家」
フェルメール

るといふ。左手前に大きく描かれたカーテンと椅子の存在により、私共は柔らかい光に包まれた静かなアトリエをのぞき見ているような感じになる。少女の服の青、手に持つ本の黄の配色は見事で、地図やシャンデリアの上を流れるような光はとても美しい。

この名画は私にとって特別な思い出となった。それは二〇〇四（平成一六）年四月、東京都美術館で開かれていた「栄光のオランダ・フランドル絵画展」で、主催者のいう「栄光の時代が生み出した美の精華」に再び触れることができたからである。ルーベンス、ファン・ダイク、レンブラントの名品とともに展示されていた。私はフェルメールの作品について特別の関心を寄せてきたが、この作品は彼の代表作の一つで、ウィーン美術史美術館のみならずヨーロッパ絵画の珠玉であり、作者にとっても最も野心的なものではないか。

同年五月、銀座で「真珠の耳飾りの少女」という映画を鑑賞する機会があった。これはドレイシー・シュヴァリエ原作の、世界で二〇〇万部のベストセラーとなった同名の恋愛小説を映画化したもの。この題名の絵画は勿論、フェルメールの作品で通称「青いターバ

ンの少女」とも呼ばれているもので、かつてオランダのハーグにあるマウリッツハイス美術館で、同じくフェルメールの「デルフトの眺望」やレンブラントの「トゥルプ博士の解剖学講義」などと共に鑑賞したことがある。この絵は二〇〇〇年春に大阪市立美術館で展示され、我が国の美術愛好家の話題をさらったのも最近の出来事だ。映画の方はストーリーも面白く、フェルメール家のアトリエの内部のセットが「アトリエの画家」を忠実に再現しており、光線の描写を得意とする画家の面目躍如のレイアウトだった。



「草原の聖母」ラファエロ

絵を見て直感するのは人物の配置が三角形という構図の安定感と、背景の空や草原の割り付けや色彩などが絶妙で、それぞれの人物も表情豊かに描かれ、見事な調和をなしていると思う。また、聖母の鮮やかな赤と青の着衣が印象的だ。

——女性と子供の崇高な美しさのみが超越したものであるという概念を呼び起こす。一五〇〇年を経て美術は、そこに描かれた人物が何も付け加えることなしにそのまままで永遠で神々しいもののように見える高みに達したのである——（ヤコブ・ブルクハルト）



「青い服の女王・マルガリータ」ベラスケス

五歳（白いドレス）、八歳（ブルーのドレス）の時の
 女王を描いたもので、女王の成長振りを知らせるため、今風に言えば見合
 い写真代わりにウィ
 ーンに送られたもの
 という。

ディエゴ・ベラスケスの「マルガリータ」。彼の代表作のこの三枚組の宮廷肖像画が特に有名である。スペインの女王マルガリータ・テレサは幼くしてウィーン皇室に嫁ぐことが決まっていた、スペインの宮廷画家だったベラスケスが女王の三歳（バラ色のドレス）、

美術史美術館を後にしてベルヴェデーレ宮殿に行った。この宮殿は上宮と下宮があり、上宮から下宮に向かって美しい下り坂の庭園があつて、下宮の先には素晴らしいウィーンの街並み、遠くのウィーンの森を一望できる。



ベルヴェデーレ宮殿（下宮より庭園を挟んで上宮を望む。上宮に「オーストリア絵画館」がある）

トルコ軍を撃退し、スペイン継承戦争でオーストリアを勝利に導いたオイゲン公のために、下宮が一七一四年、上宮が一七二三年に完成した。現在上宮には「二九、一〇世紀オーストリア絵画館」、下宮には「中世美術館」と「バロック美術館」がある。「オースト

リア絵画館」には、グスタフ・クリムトやエゴン・シーレンなどのウィーン世紀末絵画の重要な作品を展示

している。

クリムトは一九世紀末のウィーンの芸術運動を代表する分離派の画家であるが、初期の仕事は劇場や公共施設の天井画や壁画などの装飾画が主なものだったので、今でも市中に散在する彼の足跡を辿り、鑑賞することができる。

クリムトの代表作は「接吻」。黄金様式の頂点を極める作品というばかりでなく、彼の最高傑作の一つである。小さな草花を愛した作者らしく、草花の上で男女がこの世から隔絶され、ひとつに溶け合っている。甘い恋の陶酔の中でどんな夢を見ているのか。肉欲的でなく、すんなり受け止められるのはなぜだろうかと自問自答してみる。それは女性が跪いて、慎ましく口を閉じているからかも知れない。この絵は全体を金色で描いたものだが、着衣に注目すると、男の衣装は金・銀と白・黒の長方形の装飾模様であるのに対し、女の方は金と赤や青を主体とした華やかな円形模様であり、この両者の調和が抜群で極めて印象的だ。

エゴン・シーレはクリムトの影響を受けた画家であるが、クリムトの金色に輝く明るさと華麗さに対し

「家族」にみるように暗い感じの絵を描く。男女の視線はそれぞれ別の方向を見つめ、恰も人生に幻滅しているようで決して幸せそうには見えない。この絵はシーレ夫妻とまだ生まれていない子供を描いたものという。この絵を制作した直後に妻は妊娠中に病死し、彼自身も数日後にこの世を去った。何か運命的なものを感じた作品だ。

○

今回とりあげた題目は中欧三カ国（チェコ・オーストリア・ハンガリー）を旅行した中での一齣として、ウィーンの最も有名な美術館である「美術史美術館」と、ウィーンを代表する分離派画家の作品を納めている「オーストリア絵画館」の「見て歩き」に絞った。文の内容や性質上、もっと写真との対比が豊富にできれば理解され易いとの思いもあったが、意の如くならず、ご容赦いただきたい。（二〇〇四年・記）



わが青春の彷徨

吉住 自由造

(柏原町)

〔編集部まえがき〕本稿は、この六月に出版された「自由造の各駅停車でありがとう」の抜粋である。筆者の吉住氏は大正五年、旧大路村生まれ。中学進学を目ざしていた小学六年の時、父が米相場に失敗して家運が傾き、新天地を求めて一家で軍港の街、舞鶴に移住した。中学進学を諦め、国費で入れる師範学校を受験したが、体格検査ではねられ、失意のうちに丁稚奉公に出ることになる。

本稿はそのくだりであるが、三度目の奉公先で、自分の商才を見出し、舞鶴に戻って食料品店で自立への第一歩を踏み出す。昭和九年、筆者十八歳の時である。その後も時局に応じ様々に商売替えをしながら、戦後、東京の衣料問屋街に園児服の問屋を立ち上げて軌道に乗せ、二代目に経営を預けて引退する。その後はPHP文化フォーラム「植生の宿」を設立し、様々な社会活動に参加して現在八十七歳、この六月に米寿を祝う盛大な祝賀会が開かれた。

丁稚奉公を振出しに

中学校にも師範学校にも入学できず、進学の希望がすべて絶たれた私に、残された道は就職だけだった。当時は昭和の大恐慌。国も国民も貧しく、ハンストが流行していた。就職難といわれる現代とは比較にならない深刻なものである。「大学は出たけれど」という映画が上映され街には失業者が溢れていた。「棄民」(見捨てられた民)という言葉も、この時生まれた。

尼崎に父の従兄弟で、会社勤めをしている吉住誠治という人がいた。その人の紹介で、大阪船場南本町三丁目の「田村亀商店」という洋反物問屋に丁稚奉公することになった。

出発の朝は、食卓にはお頭付きの料理が出た。仏壇にも別れの挨拶をした。母は「御免ね、御免ね」とさびしそうにくり返す。それでも最後は笑顔で送り出してくれた。僅か二年間の家族揃っての思い出深い暮し。そんな家に別れを告げ、父に連れられ舞鶴を発った。

父は福知山時代の豪勢な暮らしが懐かしくなったのか、福知山線回りで大阪に向かうことになった。春日

町黒井駅付近で三尾山が見えた時には、さすがに込み上げるさびしさを抑えきれなかった。皮ベルトのついた鮎色の柳行李がひどく重かったのを覚えている。

船場の店は、この土地特有の黒壁の軒の深い、奥行きのある立派な瓦屋根の家だった。店は広い土間と畳敷きで、時代劇に出てくるあの本店わおだの構えである。父は私を送り届けると、すぐ帰っていった。店員は三十人くらいだったろうか。女中が三人いた。私は新參の小僧ということで、同時に入店した三人と二階の薄暗い一室をあてがわれた。

あくる日、番頭に呼ばれて「今日からお前の名前は春吉ということにする」と言われた。親の付けてくれた立派な名前があるのに「春吉トン」「春六トン」と呼ばれ、掃除と荷造りに明け暮れる毎日だった。風呂はいつも残り湯で掃除をさせられた。食事も一番後で、番頭たちとは違うおかずが並んだ。味噌汁に漬物、イワシの焼いたものが多かった。

珍しく店に座り、洋反物の巻き方を教わることもあった。これはとても難しく、幾度も幾度も巻き直しをさせられた。不思議なもので、当時の記憶は定かでない

のに「玉撚り絹錦紗」という反物の名称だけは今もはっきり憶えている。よほど懲りたのだろうと思う。

荷造りをした商品を船場の織維問屋や地方に発送する。鉄輪の荷車はガラガラと大きな音を立てて、非力の私にはとても重かった。

当時の船場には伊藤忠、丸紅、田村駒、伊藤萬など名だたる織維問屋が軒を連ねていた。これら世界に類例のない日本の大商社のルーツを辿れば、ほとんどが船場につながっているということになる。

入店して半年目に、古參の店員と何度か行ったことのある梅田駅（現在の大阪駅）で、地方への駅出しがあった。こんな店にいつまでも居るもんか。入店以来、いつ逃げ出そうかと、一日として思わぬ日のなかった私に、脱出のチャンスが巡ってきた。先輩店員に「一人で大丈夫です」と告げて安心させ、大八車で梅田駅に向った。荷物の発送手続きを済ませ、駅前広場に荷車を放置して神戸に飛んだ。私はその場で、あの涙と笑顔で送り出してくれた母に、「私は店を出たが、心配しないように」と電話することだけは忘れなかった。店では私が帰ってこないで、騒ぎになっていた。

梅田駅に行ってみると、大八車が広場に放置されたままで、ますます大騒ぎになったようだ。身元保証人の吉住誠治さんは呼び出され、ひどく咎められたようだ。誠治さんが私の行李を引き取ったことを後日聞いた。

家に帰ることもできない私は、その足で神戸の兄を頼って行った。兄とて私とたった二つ違いの店員に過ぎないのだから、どうしようもない。兄から口入れ屋に行くように勧められた。当時は職安などなく、就職、仕事の斡旋は口入れ屋がやっていた。窓ガラスに物件の紙を貼った現在の不動産屋のような小さな店から、大きな店になると、質屋のような暖簾が下がっているところも多かった。

私は、兵庫区鍛冶屋町の穀物取引仲買人の手納商店てのうに入店した。店員数名、住込みは私だけ。入って三日後に付近一帯の大掃除があった。掃除が終わわり、夕食に五目飯が出た。私が食卓のおかずに箸を付けるのを見た主人は「五目飯にはおかずが混せてある。そのうえおらずに手を付けるとは小僧のくせに生意気な奴だ」と、ひどく私を叱責した。私はその夜、この家を飛び出すことにした。

あてのない私は、一度も訪ねたこともない、住所だけは空覚えのいとこ・村上まつえという人の家を探し回って、転がり込んだ。

〔持病の悩み〕の項は割愛 〓 編集部

福知山で酒屋の小僧に

舞鶴に帰ったが、することもなくブラブラしていた。図書館に行くのが仕事だった。両親は、このむずかしい息子は家に居るより他人に預けたほうがいと常々考えていたようだ。

福知山市栄町に「林庄」はやししょうという酒醬油店があった。

その奥さんの林なみ子さんと母とは大の仲良し。おばさんは美人で賢く、心優しい女性であった。

私はそこに預けられて毎日為すことなくのんびりしていた。おばさんは私を自由にさせてくれたが、おじさんの庄太郎さんは店の手が足りないのです、私を配達などに使うようになった。無駄飯を喰ってもいられないし、動くことは少しも苦にならない質なので、退屈しのぎに店を手伝うようになった。

そのうち、おじさんは晩酌をしながら私の働きぶりをひどく褒めるようになった。それにはわけがあった。

店にある洋酒のどれを届けても気に入らないお得意さんがいた。「もつといいものを持ってこい」と言われ、店はほとほと困り果てていた。これを聞き、私は、すぐさま提案をした。最初に届けた安物の酒をレットルだけ貼り替えて、今度入荷した新しい銘柄だと言って届けてはどうかと持ちかけた。しかも価格は前の倍にして差し出すのだ。そうしたところ、その客は「今度の酒は実に旨い。特別だ」とご満悦だったという。おじさんは私に商才があると思ったのか、どうしても私を酒屋の小僧にしたくなつたようだ。

ダブダブの厚司あつしを着せられ、菊正宗やキッコーマンの印のついた前掛けをするようになった。私が酒好きになつたのも、この仕事と関係があるのかもしれない。樽の下部の取口を「セチベン（シヨール）」と呼ぶ。こを捻って瓶詰をする。この時こそが利き酒のチャンスである。樽洗いといって、一、二、四斗樽に鏡板の口から小石と水を入れ、ガラガラと横に転がして洗う。寒い時はつらい仕事だった。瓶爛びんらんといって、今のよう

に防腐剤を入れないので、日持ちをよくするために、五右衛門風呂に一升瓶をギッシリ入れ、徐々に釜を炊き酒を温めて殺菌する。

この店は、兵庫県氷上郡国領村（現在の春日町）のY字型の三角地に出張所があった。この店の主人が、春日町出身だったので。普段は戸締めで月に一回、三日間ほど出張する。手が足りないので私が一人で、ここに通うことになった。福知山から国領村まで県境の塩津峠を越えて二十五キロの道のりだ。前が二輪、後が一輪の、今は誰も見たことのない足踏み三輪車のペダルを踏んで通う。子供の私には重労働だった。

このバラック同然の出張所で、私は自炊しながら氷上郡の各町村のお得意廻りをした。生まれ育つたふる里だけに、私にはとても辛いことだった。なるべく友人に会わぬよう気を遣つた。「あの重ちゃんちんが酒屋の小僧になつて村を廻つとつてや」「中学にも行かんとんでや」――、皆に驚かれたり、同情されもした。同級生や先生に会つた時など、死ぬほど辛かつたことをよく憶えている。なるべく春日町大路村には行かないようにした。（後略）

台湾と日本と中国

渡邊 隆 男

(水上町)

私は白水社で四年半小僧をやりまして、二十四歳で二玄社という出版社を始めました。そしてあれよあれよという間に五十年が経ちました。社名の「二玄社」は、「玄のまた玄衆妙之門」という「老子道德経」の一節から採りました。「玄」は中国で黒、宇宙の色、深い蒼黒をいいます。

出版文化の文化とは何だろうと考えますと、訳がわからなくなってしまうですが、文明と文化とをみんな混同しているんですね。私は文化というものは積み重ねるもの、あるいは掘り下げるものではないのか、出版というのはそういう仕事だと思ふようになって、少し文化というものの輪郭が見えてきたのです。文化というものには、新しいとか古いとかの概念がなく、重くなったり軽くなったり、浅くなったり深くなったり、

薄くなったり厚くなったりするものだなと。

文明というのは文化の所産なのです。機械文明は日進月歩、どんどん新しくなっていく。古いものを捨てて常に新しくなければならぬのです。

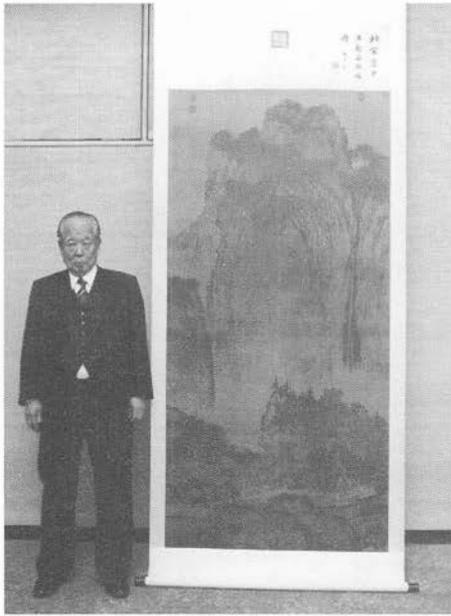
中国の文化大革命、あれはバカげたことです。文明は壊れますが、文化というものは壊しても壊れないものです。文化という言葉がどこから出たのか。ヨーロッパのカルチャーというのとも少し違うようです。ともかく文明と文化は混同したくないものです。

私は中国によく通いました。さまざまな人との交流が忘れられない、それこそ文化的見聞録と申しますが、そんな断片を思い出すままに話してみましよう。

北朝鮮は一回、韓国は十数回。中国は三十回ほど、台湾には百二十数回行きました。行くと大体一週間から十日です。台北の「故宮」によく通いました。最初は三十四、五年前です。中国歴代書画の絶品が全部と言つていいほど台北の故宮にあるので、これを見に行つたのです。うろろろ見ておりましたらこの絵が掛かっていました。范寛「谿山行旅図」という絵で、北宋時代、千年ほど前のものです。「何とも不思議な絵、こ

れが絵か？」と、毎日この絵を見たものです。だいたい絵というものは、何が描いてあるのかというところから見ますが、これはただドーンとした山があるだけ、でもじーっと見ていると、深山幽谷の靈気が迫ってくるのです。これにすっかりしびれました。

親友の日本画家の常岡幹彦さんにこれを見せましたら、棒立ちになり、やがて座り込んで顔面蒼白、両脇に酒を抱えて帰り、一人で飲み明かし、とうとう絵が描けなくなって一年間描かなかった、「描けなかった」



のです。今も范寛になぐられたといっています。

私は書だけではなくて、故宮の絵も複製したいと思いました。そしてその後二十五年をかけて、故宮書画の名作四百余点の原寸原色複製を手がけることになりましたが、その頃私は、台湾で監察院というお役所の秘書長をなさっていた郭健さんと親しくさせていただきました。郭さんは日本大学を出て無類に日本語が上手な方でした。その方のご紹介で人脈が広がっていきましました。その中に林柏壽という高名な方がいました。林さんは、学習院大学を卒業し、ロンドン大学、パリ大学に学んだ大の親日家でした。書画もたくさんお持ちで、私はよくお目にかかりました。

郭さんのお話ですが、昭和二十年に終戦になり、日本が負けましたが、蒋介石が「日本の兵隊を直ちに帰せ」という指令を出しました。早い兵は一週間くらいで帰ってきました。その蒋介石がチャーチルのところへ出向きまして、「今回の戦争で一番打撃を受けたのはわが中国だ。しかし中国は日本の占領を放棄する。だからイギリスも同調してほしい」と言ったのです。チャーチルは「占領して土地を取るの当たり前だ。

なぜ占領を放棄するか」と正した。実はそのとき既に、

日本領土の仙台以北を北海道も含めてロシアが、関東から名古屋まではアメリカ、名古屋から先、関西と四国を中国、九州を英国がそれぞれ占領するという案が決まっていました。つまりベルリンの壁、あるいは韓国の三十八度線のように日本にも壁ができるはずでした。蒋介石が「儒教の教えに『恕に報いるに徳をもつてすべし』という言葉がある。われわれは儒教のそういう教えを實行したい」と話すと、チャーチルは感心し「そういえばキリスト教にも同じ教えがある。分かった。わたしがアメリカに話そう」とチャーチルはルーズベルトに話をしました。蒋介石もアメリカへ飛んで行きました。ルーズベルトは「日本を荒廃のままほうり出すわけにもいきまい。時期が来れば考えよう」と非常に好意的な話が蒋介石との間にあったそうです。そこで、蒋介石はスターリンに会いにモスクワへ行きました。蒋介石は長期滞在を決めました。蒋介石は、粘りに粘り、ついにスターリンに会いました。「北海道だけで我慢する」というスターリンに説得を繰り返し、とうとう北海道も諦めさせたのです。蒋介石

石の説得で、ついに壁は造られずにすみしました。

その蒋介石が国民党軍を中心とした、それはもう医者から料理人から上層部を二百万人連れて、いきなり台湾の基隆に上陸しました。流血騒ぎになりましたが、そこで林さんが、「よろしい。私の台北の中央の土地を全部尊敬する蒋介石に無償で提供しよう。そこには日本時代の公共的な建物もある。それもそのまま使いなさい」と。林さんの鶴の一声で治まりました。

蒋介石軍はそこに一週間で政府を作り上げました。そして台湾国民党の政治が始まったのです。ここで蒋介石が良い政治をしていたので、蒋介石が亡くなったとき、台湾中の人々が泣いたそうです。まさか？と聞くと「ほんとだ」と言うのです。それほど皆尊敬していたのです。蒋介石総統のおかげで、今の日本があることを台湾人はみんな知っています。日本人はみんな知らない、忘れたのでしょ」と彼らは言います。かつては日本の親台派の議員たちが百人ほど定期的に集まりをもっていました。有田喜一さんもその一人でした。そのうち九州で国旗事件が起こったり、田中角栄さんが大陸と回復を始めたので、この親台派は消

滅しました。しかし何応欽將軍などは日本に招かれませんでした、佐藤総理もよく台湾へ行きました。岸信介さんが一番よく通ったでしょうか。

台湾には大きく分けて三種族がおります。「山人」、これは高砂族と呼ぶ土着民です。ポルトガルの血が少し混じっていて、彫りが深く、美人が多い。それから「平地人」、これはその昔、福建省から来て住み着いた民族です。そして蒋介石が連れてきた「外省人」の二百万人、当初は反目もありましたが、今は平穏です。

私はあるとき桃園空港に降り、迎えに来てくださった郭さんと車で市内に向かいました。途中交通渋滞で動けなくなりました。高速道路は延々長蛇の列で大型バスが並んでいるのです。蔣経国總統が亡くなり、そのお通夜へ向かう群集なのです。私が「總統のお通夜見てみたいな」と言いますと「行ってくれますか」と即、通夜に参加することになりました。

広い道は群集で埋め尽くされていますが、私は遠来の賓客、兵隊が剣付き鉄砲で捧げ筒をやってくれました。記帳とお参りを済ませてホテルへ向かいました。

行きつけのホテルはいつもの家族的な小さなホテル、

顔見知りの受付嬢が「遅かったね」と言うので、「蔣経国總統にバイバイしてきた」と。「バイバイ」というのは「拜」という字を二つ書いて、拜むことをいうのです。「拜拜してきた」と言いますと、途端にその子が僕に向かって手を合わせて「謝々、謝々」と最敬礼。「あなたがそんなに有難がることはないよ」といながら部屋へ入ると、お茶をはこんだ女中がまた最敬礼。「じゃ、一杯行くか」と巷の飲み屋へ繰り出して、同じことを言ってみると、だれもが棒のように直立不動、四十五度べったんことお辞儀をして私を拜むのです。そこで私の取材が始まります。「何でそんなに尊敬するのか。あなたのご両親が亡くなったときと比べてどうなんだ」と言うと「そりゃ蔣経国先生のほうがショックだ」と。こいつは洗脳されているのか、北鮮ではないけれども、半信半疑で探りを入れるのですが、そうではなくて本当に尊敬しているのです。

「何で？ 蔣経国はどこがどう偉いんだ」と聞くと、店のママさんがとつとつと話し始めたのです。

自分の育った嘉義という、山の中腹で十数軒の山村、それはもう不便なところで、水が来ない。山からチョ

ロチヨ口流れる水が頼り。あるとき、一人のおばあちゃんが「水道を何とかしてくれ」と政府に訴えると言い出した。みんなに止められてその時はあきらめたが、とうとう内緒で蔣経国様宛に手紙で訴えました。

忘れた頃に二、三人の夫婦がやってきてパッパッと測量して帰っていった。「何しに来たんだろう」と言っている、それからしばらくして、今度は一団の夫婦がやってきた。そして山の上のほうから水を引いて、各戸へパイプを通した。終えた後に一人の男がやってきて「わたしは蔣経国、おばあちゃん、これでいいかね」と言ったそうです。みんなすっかり感激してしまつた。こんな話が実はザラにあるのです。

「蔣経国さんはロシアの大学で農業を学んだ学者、その学識を生かして台湾中を駆け回り民のために尽くした」と、ママさんはポロポロと涙するのでした。これはやはり本物だ、蔣介石が亡くなったときに台湾中が泣いたというのも本当だなと。

私は書画の出版をやっておりますので、書画の出版で学んだことを少し申し上げておきます。

王羲之という、中国で言う「書聖」、書の神様です。これは伝説的な人ですが、實在の人物のようです。この王羲之があるとき町を散策しておりますと、建築中の家があった。ちようど昼飯時で大工が留守だ。見ると、そこに綺麗にかんまで削つた木があった。王羲之はもうたまらなくて、矢立てを出してその削つた木肌を削りに削つたが消えない。その深さ三分に及んだ。大工がそれを話したら、村人が「おい、お前は大変なもの、削つちまつたな。消えない字は王羲之先生が書いたにちがいない。この書を書れば家のもう一軒や二軒建つたんだ」と。中国では名高い寓話です。

これを「入木道（じゅぼくどう）」と言います。中国では入木道というのが書道のことなのです。日本の書道という言葉は中国にはないのです。書法ともいいますが入木道でみんなに通じます。ここに日本と中国の、書画の基本的な違いがあるのです。日本の書画は平面デザイン、平面構成。日本の作家は、この紙面にどんな書で何字、どう詰めて、この空きをどう響かせ

てと一生懸命考えるのです。だから空白にやかましいのです。一方、中国人はそんなことをあまり気にしない。いきなりどんどん書き進み、できたときに、「ちょっと詰まったか、まあいいや」と成り行き任せです。

そこで「直筆」「逆筆」という筆遣いがあります。筆が立つと行って、文章が書けることにも使いますが、筆をぞうきん棒のように押していく、ぐいぐいと擦っていくような筆法です。この反対を「順筆」と言いますが、これは引きずるのです。子どもはよく筆を引きずります。だから気力のない書になってしまふ。ここが基本的に違うので、中国では逆筆、起筆から逆に打ち込んで行くような書き方を皆します。中国での筆法は平面的ではなく、上下運動なのです。削ると言うか、えぐると言うか、筆力紙背に徹すとよく言いますが、突き抜けるような筆圧を、つまり心理的な筆意を重視するわけです。書には感情、性格がはつきりと出る。これが平面的な筆法では出ないのです。書は上手下手よりも何よりも、筆者の性格が出る鏡なのです。これはごまかせないのです。習うと上手にはなるけれども、いい字は書けない。本当にいい字を書くためには人格

を訓練しなければならないのです。

王羲之の書に唐の太宗がほれ込んで、あらゆる王羲之の書を集めて自分の墓に埋めさせました。だから王羲之の書は一枚も残っていないのです。すべて敷き写しをさせて本物を埋めました。あと二十年か三十年かのうちにいつかかならず掘り出されるでしょう。

「王羲之に負けるもんか」と、元時代の趙子昂という有名な書画家が、一生かかって王羲之を追い越そうと精進しました。しかし王羲之には近づけたが、ついに越せなかったと、そんな文章を残しています。

その後、「いや、趙子昂はあの王羲之よりうまい」と言った人もあります。うまいのですが、本人がどうしても及ばなかったと言うのは何でしょう。人格が追いつかない。王羲之は千何百年も前の人で、会った人は一人もいないのです。しかし、書というのはその人が見えるのです。習い込んでその人格を感じ、「やっぱり王羲之はすごい」と思い知るのです。

私が尊敬する西川寧先生が、あるとき、「王羲之、王羲之と騒ぐけど、どこがどう良いのか言える人はいないでしょうね。しかし、わたしはそれが少し分かつ

てきた、これを見たまえ」と言つて王羲之の書の拓本を開き、「例えばこの書、この字をしつかり見たまえ。偏とつくりの間をね、ジーツと見るとどうですか、心もち広くないか。これは習つてみるとよく分かるけれど、ちよつと一ミリの何分の一か、そのくらい広い」。よく懐と言うのですが、その懐が広いのです。「これは真似て書けるもんじゃない。自然に出る人間の感性、ほのぼのとした豊かさ、これが書けない、遂に及ばなかったと言つた趙子昂のそれじゃないか」と。

禅僧の書く書を「墨跡」と呼んでいます。これは気合いで書くのです。「えい、やあ」と。気持ちいいほど勢いよく書きます。しかし、あれはどうもインチキ臭い、第一に我流の崩しを平気でやるので読めない、こんな書は歴史には残りませぬ。残つた偉いお坊さんの書は入木道でじっくり書いています。

国文学者の津田左右吉先生が亡くなる前のことでした。私は先生の枕元で「君は書道の出版をやっているが、中国の書をどう思うか」と問われたのです。「中国の書って、先生すごいですね」と答えると、「そう

でしょう。書に限らず日本は中国からいろいろなものを学んだ。西洋からも貪欲に吸収した。ところで日本がほんとうに世界に誇れる美があるだろうか。実は一つだけある、覚えておきたまえ。それは古筆切れと呼ばれる一群の平安朝の仮名だ」と。「仮名も中国の草書体からできたもの」と言う。「その通りだ。私の言うのは、あの仮名に表れた繊細な感性、日本人のデリカシーなんだ。これはほかの国にはありません」と。

私はその後、写真室で平安朝の仮名の一部をどんどん拡大してみたのです。すると、あのなよなよとした、たおやかというか、なだらかな線條が、すごく強く見えてきたのです。折り返しなどというのは、パキッと音がするほど激しいのです。このぬらりくらりして見えていた線に、まるで鋼鉄を曲げたようなすごい力感が表れたのです。拡大して初めて気づき、今度は原寸のものをよく見ると、やはりそうなのです。これまでは漫然と見ていたのですね。

高村光太郎も「日本の平安朝の仮名に勝る抽象的線美を、世界の美術の中で見たことがない」と言っています。日本にも自慢のできる美があることに気づきま

した。そのデリカシーは、やはり京都・奈良に起こった貴族文化、僕は女性的文化だと思っています。

この范寛「谿山行旅図」は例の逆筆で描いている。この点も線も穂先で突くような逆筆で書いています。日本の仮名とは全く異質の男性的なものですが、これを見てみると圧倒されます。山の音が聞こえてくるような、そんなすご味があります。みんなそれにしびれるのです。高山辰雄さん、加山又造さん、そのほか、私は大勢の日本画家を故宮にご案内したことがあります。これを見ると先生方が動かなくなりました。高山さんなどは、これでポーっとして一日動かない。床にあらぐらをかいて座り込んでしまう。みんなこれにやられるのです。「ああ、先生も范寛病ですか」などと。

津田先生のお弟子さんで、栗田直躬という早稲田の東洋哲学の先生ですが、私の先生で、二玄社という名前をつけていただいた方ですが、中国通でした。会津八一さんたちと北京に留学したりした方なのですが、「忠告しておくが、君は中国人とだけは商売しちゃいかん」と、こうなのです。それで僕は「どうしてでしょ

うか」と。「中国というのはね、日本から太平洋を越えて、アメリカ、ヨーロッパを回ってシルクロードを通ってやっと辿りつく、あれが一番遠い国なんだ。近くて一番遠い国なんだ。そう銘記したまえ」。「なぜですか。顔も民族もそんなに違わないし、文化も……」。「いや文化だって根底から違うんだ。それをみな一緒にしてしまふ。商売すると必ずやられちゃうから、絶対取引するな」と厳命されたのです。もうお亡くなりになりましたので、早速商売をしています。

「日本は周囲が海で、山の懐に抱かれている。日本人は自然を愛する民族だ。自然と共存する。生け花一つにしても、野にあるごとく生けよと、これが日本人の感性なんだ。ところが中国人にとって、自然は敵なんです。一晩のうちに川の流れが変わって流されたりする。北は極寒、南は亜熱帯、広大な砂漠に挟まれている。それに北夷南患、ひとは苛酷な自然からいかに身を守り、生き延びるか、これが数千年の中国の歴史なのだ。日本と一緒にしてはいけません。中国人は、毛布一枚とヒモが二本あれば、橋の下どころじゃない、山ん中でも雪の中でもちゃんと生き延びる強靱な民族

なのです。日本人のかなう相手じゃありません。つき合うのは結構だが、商売すると必ずやられますよ」と。

確かにそのような日本人と中国人の違いが、深入りすればするほど分かってくるのです。

例えば賭ろです。中国のお役人の机の引出しはその昔、向こう側へ抜けていたのだそうです。そこにボンと入れるとヨ一シというようなものです。今や笑い話ですが、本当に抜けていたそうです。ところが、そこは解釈が違います。賭ろは当然の報酬なのです。「これだけのことをしてくれた代わりにこれで」という、これは礼儀なのです。お金で釣る賄賂は中国でもむろん厳罰です。謝礼を受け取ったら、信用された証し。少しずつ徐々に信用を深めます。

だから中国では、やはり親子兄弟、身内が一番安心できる関係なのです。その次が同郷者。同郷者は頭から信用します。が、異郷人は信用しない。例えば上海人と広東人などは絶対に商売がうまくいかない、もうハナから信用しないのです。用心深く関係を少しずつ蓄積し、徐々に近づきます。薄皮をはぐように友好の輪を広げていく。だから会食が多い。食事中に商談か

ら何からみなやってしまいます。だから、二時間はかかる。三時間かかることもザラです。

そこで、酒飲みの番付というのを聞きましたので、ご紹介します。酒飲みには八種類がいるというのです。

一番上が「酒聖」、これが一番いいわけです。酒聖というのは穏やかにのんびりと飲むいいお酒飲みのことですね。次に「酒仙」というのは孤独な飲み方。三番目の「酒豪」というのは、字のごとく幾らでも飲む。

四番目が「酒鬼」、鬼というのはお化けなのです。日本で言う二本角の鬼ではない、お化けなのです。これはどんな意味かと言いますと、「さあ、一杯飲め。おれの酒が飲めねえのか」というようなことで、自分は飲まないで人に無理強いをする。あれを酒鬼と申します。「酒乞(しゅこつ)」というのは、「もう一杯くれ、もう一杯だけ」と、しつこく飲む。心当たりの方いらっしやいますか。あとは「酒乱」、「酒狂」、「酒吠(しゅば)」とつづきます。酒吠というのは喇叭(らっぱ)の吠です。大声で何を言っているのか分からない。

それから、酒席のテーブルマナーですが、ぜひ覚えていただきたいのです。まず、わあっと入って円卓を

囲みます。客を招いた主人が一番末席ですが、客は互いに上座を譲り合わなければいけません。これは今の大陸と台湾で違います。台湾は昔からのやり方をしっかり守ります。大陸は共産主義になってから、若いのが平気で上席にドーンと威張って収まる。ここらが今、台湾側からすると、鼻持ちならないのです。

入り口から奥が上座で、女中さんが料理を持って出入りする方が下座です。なるべくその下座へ座ろうとみんな努力するのです。「いや、どうぞ」、「あなた年上ですからどうぞ」、「いや、あなたがこの道の先輩だから」と、延々五分ぐらいは本気で譲り合います。

日本人はそれを知らないのです、言われるままいきなりスツと行って、トンと座ってしまうのです。そして「あれは馬鹿じゃねえか」と、みんなに思われるのです。なかなかいいものです。譲り合うというのは。

やがて、席が決まったら乾杯が始まる。乾杯というのは、読んで字のごとく全部飲まなければならないと思うのですが、そんなことはありません。飲めない人はほんの少し口へ運ぶだけで、飲まなくてもいいのです。それで「どうも」と会釈だけして。何ならお茶でもジュー

スでもいいのです、これは作法ですから。

日本人はみんな手酌でやるのです。これが長い習慣だから直らないのですが。中国人は一人では飲みません。必ずだれかを見つけて「さあ、誰それさん、一杯いこう」「だれだれさん、どうぞ」、ピヤッと目と目で「うんうん」、向こうも「よし、よし」と、少しずつ和やかにやっていくのです。これは本当にすばらしい飲み方だと思えます。主人、そして主賓から順番に一人ずつ右回りに仕かけます。十二人いると十一杯飲むのです。その十一人がまた一通り乾杯をやるくらい回数になり、飲める人はどんどん酔っぱらってしまいます。日本人はおだてられると喜んで、すたこらいってしまいます。わたしは酒席で倒れた仲間を何人担いで帰ったことでしょうか。これまた甚だよろしくないのです。

乾杯では、メイン料理が出たときには、「さあ、みんな一杯」と、誕生日などは大変です。「だれその誕生日」、「今日はお天気がいいから」と何でも乾杯の肴にってしまうのです。この酒盛りは延々と続きます。ご参考までに申し上げます。

■会員が書いた本

吉住自由造著

『自由造の

各駅停車でありがとう』

PHP文化フォーラム「植生の宿」発行



本書の半分以上を占める第一部「私の歩み」は、今年で米寿を迎える著者の生い立ち、辛い丁稚奉公、事業主としての独立、戦時下の混乱、上京と挑戦などが明るい口調で淡々と記してある。立派な自伝であり昭和時代史でもある。

後半の第二部「随想 夢の轍」は、第一部で十分に記せなかつた体験や

趣味、旅行、今やライフワークの幅広い活動に関する随筆である。春日町という故郷を共有するオペラ歌手、足立さつきさんの後援会名誉会長としての奮闘記や「なぜ国旗を掲揚しないのか」「この国家意識の希薄さはなにごとだ」という憂国の文も少なくない。三つの教室で日本舞踊を習ったが、どこでも男性の門弟は著者一人だったとか、敬老慰問活動で踊ったが集まった老人は自分より年下ばかりだったとか、著者の生き生きとした活動が随所で描かれると我々凡人どもは敬服するばかりである。

「私の歩み」の冒頭で読者の誰しもが心を打たれるのが進学の断念である。手広く米穀商を営む父が米相場で失敗したため、中学進学を諦めた著者は「ブラジル移民のような不安」を持ちながら家族と一緒に舞鶴へ移住し、当地の小学校高等科を首席で卒業する。

このような境遇の子供が希望を託

すのが官費で学べる師範学校への進学である。だが著者は、どの受験校でも学科試験に先立つ体格検査で撥ねられてしまう。残された道は大阪船場の洋反物屋での丁稚奉公だった。そこを飛び出して神戸の穀物問屋の小僧となるが五目御飯なのにおかずに出し……正に「路傍の石」を地で行く受難記である。

だが、おのれの商才を自覚した著者は十八歳で米・雑穀・青果の吉重商店を舞鶴に開店する。その店は成功したのに惜しげも無くたたみ、上京して建築関係の仕事に就きながら夜学で建築を学ぶ。それから先は一転してサクセスストーリーである。戦後もコロコロと事業を変えながら絶対に倒産や不渡りの憂き目には遭わない。それは筆者の誠意や商才によるものだが、読む人によってはビジネス指南書であろうし評者などには貴重な歴史の証言であった。(徳田)

■郷里について書かれた本

『分県登山ガイド27

兵庫県の名山』

山と溪谷社発行



兵庫県の名山を選べと問われたら貴方なりに百の山を選べますか？百も知らない？困りますねえ、神戸の六甲山や姫路の書写山ぐらいいはご存知でしょう。何？その次は、もう氷上郡の山ですか？愛郷心も結構ですが、兵庫県人なのだから養父郡の水ノ山や、お隣の加美町と生野町の境界に聳える千ヶ峰も知っていますよ。そして兵庫県全体のバラ

スを考えると、我が郷里の山は幾つぐらい選べるのでしょうか？こんな山談義に興味のある方には非御覧頂きたいのが、この本である。

本書で挙げられている氷上郡の名山は二つだが、県全体のバランスからも妥当な数値であろう。さて、その二つの名山は、どれだろうか。標高で選ぶなら篠ヶ峰、江戸にも知られた山なら清水山……基準によって色々選べるが、出版社は登山で知られた山と溪谷社である。やはり人々が登りたがる山、そして眺望もよく、風格のある山ということになる。選ばれたのは、中央分水界の上に立つ五台山と舞鶴高速道路の完成で京阪神の登山者に人気が出てきた三ツ尾山であった。この二つには共通点がある。便数こそグッと減ってきたが、どちらも福知山線の駅からバスで登山口まで行けるのだ。兵庫県の百山すべてが、バスでアクセスできるのを前提に選ばれている。地域の「交

通弱者」のため、そして遠来の登山者のためバス路線を願う気持ちが入められた書物でもある。

したがって市島町からも登れる五台山であるが、佐治行きのバスを利用できる氷上町側の香良口から岩滝寺、独鈷の滝を経て藤の目溪谷沿いのコースを紹介している。これは新設されたコースなので、かつて伊佐口から登った人には不満かも知れないが、氷上郡の山々の道は、元々遠来の登山者には不親切な上に、昭和四十年代以降は荒れ果てて旧道というより廃道に近いからやむを得ない。三尾山の方も大きな道標のある中山から入山し、最後は佐仲峠から東中へ下るよう解説し、高速道路から来たマイカー族には駐車適地まで親切に示してある。「アルペンムードと展望が楽しめる山」と褒められているのは、岩稜が少々あるからだ、三尾山が西多紀アルプスの仲間という好条件も幸いしている。(徳田)

◆足立和巳さん

いよいよ今年は田舎が丹波市政となる年で、まことにお目出度いことではありますが、遠阪村中佐治で育った私にはピンと来ません。

◆大垣忠男さん

五月十六日(日)宝塚ホテルで男女合同のクラス会に久しぶりに出席してきました。

◆荻野守さん

(株)社熊谷組東北支店に勤務しています。

◆小口貢子さん

四月頃かと思いますが、いつも聞きます枕元のラジオから、NHKの番組で「木の根橋」のレポートをしてくださる方の軽やかなお声が聞こえてきました。木の根橋も検診して長寿対策を採ったとか。私も長生きできますように、その姿を思い出して、いい時間を

すごしました。

◆岸部正巳さん

田舎にいた息子も上京して来ました。田舎に行く機会も少なくなり「遠くにありて思うもの」になりました。脳梗塞をやつてから、足が不自由になり、どこに出かけるにも不自由をしています。

◆桂 照子さん

梅雨というのにまるで盛夏のような暑さが訪れて来ました。本年も暑さに負けぬよう暮らしていきたいと思っています。

◆門脇俊一郎さん

小生、平成十六年春の叙勲に際し、瑞宝中綬章を受賞いたしました。

◆金子 徹さん

昨秋脳梗塞で入院しました。軽い症状で済みましたが、物事に煩わし

さを感じるようになりました。

◆可部美智子さん

全陶展は終了したところなのですが、その後すぐ広島へ(主人の母が九七歳で入院しています)行かなくてはなりません。

◆北村加代子さん

今年四月に、主人の転勤に伴い二三年ぶりに大阪に戻ってまいりました。丹波にいたころより長く関東(静岡)に暮らせたこと、うれしく思います。

◆木呂場明子さん

久しぶりに出席させていただきます。自宅の仕事をごなすことにも慣れ、余裕もできましたが、ハッスルし過ぎて疲労蓄積状態。

年齢を重ねるとともに行動範囲が限定されていきます。幅を広げるよい機会とさせていただきます。

会・員・だ・よ・り

◆酒井重男さん

(社)日本技師会で忙しくしています。今年、NEDOをバイオマスエネルギーのプロジェクトでやることになりました。

◆大録和代さん

毎年お便りありがとうございます。元気に過ごしております。いつの日か出席させていただく日が来ることを願っております。

◆竹内博子さん

手の指二本のしびれで一年悩み続けて、歯の治療、整体にも通っても改善なく、テレビの健康番組も見るようにして、食品の買い物だけは杖をつけて出かけています。皆様健康でお過ごしください。

◆谷垣尚・富子さん

尚・昨秋大手術をするも今は元にも

どって元気です。富子・乳がん手術後二年余ですが、抗がん剤の副作用などで体調不良で毎月内科・外科と通院中。何とかやっています。

◆塚本敏子さん

体調がよくないのに孫の世話で忙しい毎日です。

◆堂本和三郎さん

七月九日～十二日、北海道にゴルフに行っています。皆様元気でお暮らしたことと思います。もうわれわれも六三歳になります。ふるさととは遠きなりにて想うものですネ。バリバリの現役です。

◆中沢徳晶さん

昨年より茨城に単身赴任中です。

◆野村節三さん

定年後五年目。目下市委託の海・河・川水の水質調査を行っています。



かつての棚田も均されて休耕田に倉庫が建つ。山並みだけが昔のままだ。

◆浜田美代子さん

日々地域社会のボランティア、趣味のサークル活動、孫の世話等に忙しくいたしておりますが、年の精か風邪をひいても回復力が弱い今日この頃です。

◆水船隆昌さん

会社引退の潮時も見計らいつつ、余力を残した仕事をしております。誰もが辿る道とは知りながら、いささか淋しさも感じるこの頃です。

◆渡邊義弘（旧姓飯田）さん

小生、三田市永沢寺二一〇の永澤寺住職ですが、昨年二月より後記の本山に常在しています。

横浜市鶴見区鶴見二一〇
大本山総持寺

電話〇四五―五八一六〇二一

◆山内正和さん

昨年八月から盛岡市に単身赴任中です。

◆訃報

平成十五年九月一日より十六年八月三十一日までに事務局に届いたものです。ご冥福をお祈りします。

川村	和子殿	平成15年5月27日
山崎	永子殿	同 8月29日
西田	良一殿	同 12月18日
谷口	明朗殿	16年2月
足立	護殿	同 3月13日

〔編集部よりお断り〕従来、隔年で本誌に「会員名簿」を掲載しておりましたが、昨今の個人情報取扱いに関するさまざまな事情に鑑み、本号の掲載を見合わせる事になりました。事情ご賢察のうえ、ご了承ください。

ただし、お知合いの方の住所などのお問い合わせは事務局（☎03-3936-2401・坂上）までご連絡ください。また住所等の変更も事務局宛お知らせてください。

原稿大募集

本誌は会員皆様の寄稿によって作られております。どんな内容でも結構です。ふるってご寄稿ください。



- テーマ：①ふるさと随想
②近況エッセイ
③会員だより（短信）
④丹波を撮る（写真）など

締切日：原稿はいつでも受け付けております。次号の最終締切日は平成17年8月20日です。

原稿枚数：400字詰4～5枚程度
送付先：〒247-0005 横浜市栄区
桂町1-1-1-101
(株)ホンゴ出版内
『山ざる』編集部
TEL 045-895-2712
FAX 045-895-4338

■ワープロで打たれた方は複写のフロッピーをお送りください。

展 覧 会

●荻野美穂子展

荻野美穂子展は、平成16年5月21日から27日までの7日間、東京銀座「アトリエTK」で開かれました。

今回は「くればす編」と銘打ち、クレパスのぬくもりを生かした作品が展示され、観客の目をひきました。

「荻野さんの黒は小品においても味わいの深さは変わらない。かえって小さい画面の作品にはその大きさにおさまりきらない黒のやさしさが溢れていて作品のそばに感じるだけで、ふしぎと心がなごんでくる」(村松比十志氏)と感想が寄せられました。

●安田虚心「水墨画展」

南画界の重鎮として活躍されている安田虚心氏の水墨画展が、去る8月17日、22日の間、東京銀座の「鳩居堂」で開かれ、多くの南画ファンを魅了し

ました。安田氏(高槻市在住)は大正12年、水上町(旧幸世村)生まれ。祖父鴨波、父栗郷の後を継ぐ南画家の3代目、現在も日本南画院理事として活躍中。次回、東京では平成18年に開催の予定です。

公 演

●西崎祥舞踊公演、来年5月に

西崎 祥さんの丹波での舞踊公演は来年で10回目を迎えますが、それを記念して来年5月22日(日)、柏原町「丹波の公苑ホール」で舞踊公演を開きます。この記念公演では本格的な古典舞踊のみで構成し、伝統芸能の良さを味わっていただきたいと抱負を語っています。

同 窓 会

●平成16年度柏陵同窓会

東京支部総会開く

7月11日、九段会館にて開催されま

した。植田憲雄会長、井口剛校長はじめ阪神支部鈴木啓之様、京滋支部吉田三朗様また兵庫県事務所からと多数のご来賓のご臨席を仰ぎ、83名の参加となりました。

今年の幹事役は10回生の皆様でしたが、西川宣孝さん、仲一聡さんらの旗振りで21名もの同期生が参集され、数の多さに驚かされた昨年をさらに上まわりました。

藤平卓三さんの司会のもと会は大いに盛り上がり、高校三年生を全員で歌った時は、年代の差を忘れ、皆が同じ歳に戻ったようでした。毎年続けられている柏陵セミナーはやはり10回生で東北大学名誉教授、理学博士の山口泰男氏の「磁石は何故くつつくか」と題した日常身近な磁石のお話でした。

氏は40年にわたり磁石の研究に携わってこられました。毎年先輩諸氏によって行われている多岐にわたる講演内容から、本校の層の厚さに今更に驚かされます。今回は平成17年6月18日(土)に

やはり九段会館での開催が予定されております。幹事役の11回生に期待が寄せられます。



同好会

●氷上ゴルフ同好会

ついに70台の好スコアが。今年度も盛況に93〜96回が開催されました。

6月3日、金乃台CCでの第95回コンペは過去最高ともいえる24名が参加、その中で氷上会初の70台が出ました。金出一郎さん（春日町）のグロス78（2位）です。これに刺激されて古参メンバーも頑張りました。細見次郎さん（氷上町）同82の1位、松下文雄さん（柏原町）同84の3位、大野富士夫さん（市島町）同92の4位と奮闘。

初参加で入賞の資格がなかった高見秀史さん（市島町）、上田雄彦さん（山南町）、山田良一さん（氷上町）の面々もなかなかのゴルフ達者、次回以降もますます激戦が予想されます。しかしスコアに関係なく毎回楽しいコンペです。平成17年9月には100回大会を迎えます。氷上の歴史は永く永遠です。

同好の士よ来たれ!!

なお、ホームページにて9月9日のザ・カントリークラブ竜ヶ崎での96回コンペの様子をご覧になれます。

<http://www.pcc-taiyo.co.jp>



猿

友

会

井田悦子 喜田綾子 長尾貴美代

大石佐代子 小糸イキ 安原三智子

小田明子 笹倉郁子 塩見みつえ

可部美智子 篠原よね子 渡邊貴美子

岸本昌子 千葉淳子



ビル・マンションの総合管理

株式会社 **長 友**
ちょう ゆう

取締役社長 谷 口 浩 章
(氷上町出身)

本 社 〒101-0041 東京都千代田区神田須田町2-6
TEL 03 (3257) 9611 FAX 03 (3257) 9619
E-mail h.taniguchi@mx4.ttcn.ne.jp

大阪支店 〒541-0048 大阪市中央区瓦町3-5-7
TEL 06 (6222) 5076 FAX 06 (6222) 5025

エクステリア専門商社

株式会社 **トコナメエプコス**

会 長 松 下 文 雄 (柏原町)

代表取締役 広 瀬 寿 和 (山南町)

〒160-0003 東京都新宿区本塩町23 第2田中ビル
TEL 03-3354-0211 FAX 03-3354-7767

調布市文化会館たづくり内
アカデミー愛とぴあ
文芸誌「たきおん」同人

木 村 つ た 江

〒182-0005 東京都調布市東つつじヶ丘2-39-5
電話 03-3300-6895

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます。

電気主任技術者第一種免状	第2-319号
技術士（電気部門）登録証	第15810号
エネルギー管理士（電気）免状	第 2857号
エネルギー管理士（熱）免状	第 5191号

若 森 技 術 士 事 務 所

所 長 若 森 敏 郎

〒302-0023 茨城県取手市白山5-4-13
TEL・FAX 0297-72-0907

創刊80周年 週2回(日・木)発行
1カ月1,220円(郵送料200円)

<http://tanba.jp>



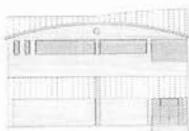
代表取締役社長 小田 晋作

関東とふるさとをつなぐ「グローバル」な紙面

丹波新聞社

〒669-3309 兵庫県氷上郡柏原町柏原 201
Tel 0795(72)0530 Fax 0795(72)1956

東・名・阪で事業展開中
大阪にATMテクニカルセンター
平成14年11月1日竣工落成



三協運輸株式会社

取締役社長 岸 本 勲

(氷上町出身)

本 社	〒121-0064 東京都足立区保木間 1-1-3 TEL 03 (3860) 8112 FAX 03 (3860) 1631
大 阪 支 店	〒578-0911 大阪府大東市新田中町 3-3 TEL 072 (806) 6821 FAX 072 (806) 2831
名古屋事業所	〒457-0837 愛知県名古屋市南区加福町 3-5 TEL 052 (691) 8574 FAX 052 (612) 2032
埼 玉 支 店	〒363-0008 埼玉県桶川市大字加納字 379-1 TEL 048 (728) 9380 FAX 048 (728) 9381
倉 庫	東京・大阪・名古屋・埼玉・兵庫・北海道

人と技術で社会に貢献する

株式会社 ユー・ティー・ケー

代表取締役社長 水船 隆昌

本社：〒102-0083 東京都千代田区麹町5丁目3番地 麹町秋山ビル
Tel 03 (3556) 8484 Fax 03 (3556) 9577

東海営業所：〒319-1111 茨城県那珂郡東海村舟石川764-10 東成ビル3F
Tel 029 (283) 0460 Fax 029 (283) 0469

業務内容：
・原子力関連事業
・人材派遣事業
・訪問及び居宅支援介護サービス事業（ハートステーション）
・広告企画事業
・食品等の卸及び販売

さすが
&
されど

60歳からの知恵と体験交流誌

隔月刊誌 [さすが & されど] 好評発売中

本誌は読者投稿を主体に編集するユニークな雑誌です
／日々の暮らしから世直しまで知恵と体験を交流し合
います／年間購読料 3,500円（税・送料込み）下記へ。

時代と共にあなたの歴史

自分史年表

一家に一冊／書く・読む・調べる記入式
歴史年表／定価1,800円（税・送込み）

これから書きつぐ生活ノート

メモリー50

1年2ページ、50年間書ける気軽な
メモ帳／定価1,800円（税・送込み）

記念の年に贈る同時代シリーズ▶ [昭和9年生まれ]（昭和16年生まれは
売切れました。）
既刊▶ [昭和4・5・6・7・8年 / 昭和13・14・15・17年] ■各巻3500円

株式
会社

ホングー出版

代表取締役 池田 忍

〒247-0005 横浜市栄区桂町 1-1-1

☎045 (895) 2712 / FAX 045 (895) 4338

Eメール：hongo@mocha.ocn.ne.jp

足立眼科院長 / 医学博士
順天堂大学眼科 非常勤講師

足立和孝

〒347-0015 加須市南大桑字下鳩山二六二〇一
TEL 〇四八〇一六五一五九八八
FAX 〇四八〇一六五一六〇九七
E-mail: kazu358@pastel.ocn.ne.jp

東京都渋谷区日中友好協会理事
日産労連・エルデータクラブ幹事
広範な国民連合・東京世話人
E M ネット 埼玉 京 理事

足立和巳

〒183-0051 東京都府中市栄町一―一五―二七
TEL・FAX 〇四二―三六四―七二二七

足立かをる

株式会社 ナレッジリンク
足立国際会計事務所

足立知佳子

代表取締役
税理士・米国公認会計士 (Certificate)
〒152-0035 東京都目黒区自由が丘一―二三―四 藤タワービル六〇二一
TEL 〇三―三七―八〇四七 FAX 〇三―三七―八〇四七
E-mail: cedaohi@ata.gr.jp

足立静雄

日本損害保険協会特級 (二般) 資格 第特一三五八六号
飯田保険事務所

飯田光雄

〒285-0045 千葉県佐倉市白銀四―十四―五
電話 〇四三―四八五―〇五〇三
FAX 〇四三―四八五―〇二九一

明治四年創業・伝統銘茶
株式会社 明日香園

代表取締役
池畑 廣士郎

本社 東京都豊島区南池袋二丁目二六―五
電話 〇三―三九八〇―三七四一

生田 清弘

東京都世田谷区成城一―七―七
電話 〇三―三四一五―一八九三

井本 義一

上野 重喜

〒234―0054
横浜市港南区港南台三―一七―二二
TEL・FAX 〇四五―八三二―七三三二

有限会社 PCC大洋

岡 吉明

〒351―0014
朝霞市膝折町三―七―一五
TEL 〇四八―四六〇―一六〇一
FAX 〇四八―四六〇―一三九七
<http://www.pcc-taiyo.co.jp>

岡林 逸男

〒177―0051
東京都練馬区関町北二―七―一七
PHS 〇七〇―一五五六―一七八七八
FAX 〇三一―六七六〇―一九八四四

梶原

やす子 清

小田 富士夫

萩野 武

久保 春雄

〒 300 - 0031
土浦市東崎町十三二一六〇四
電話 〇二九八 - 二二二 - 二九七八

木呂子 恵美子

〒 204 - 0012
東京都清瀬市中清戸二一七五〇一八
電話 〇四二四 - 一九一 - 三〇三三

株式会社 アイ・ケイ・アイ
代表取締役 岸 田 勇

〒 103 - 0013
東京都中央区日本橋人形町三二七一〇
電話 〇三 - 三二四九 - 五二六一

坂
上
勝
朗

坂
上
明

栗
田
功

高
見
嘉
都
司

〒173
-0025
東京板橋区熊野町四〇番十一号
電話 〇三―三九五六一〇六〇〇

合唱指揮者

笹
倉
強

〒352
-0014
新座市栄四―五―二五
TEL・FAX 〇四八―四七七―五六四〇

坂
上
豊

株式会社ディノス 常勤監査役

高見秀史

〒164-0012

東京都中野区本町二丁目四六一二

中野坂上セントラルビル

TEL 〇三―五三三―一〇〇一

FAX 〇三―五三三―一二二一

千種倫幸

(株)サイモン・デジタル・センター

専務取締役 塚口智

東京都江戸川区東葛西六一―一十七
電話 〇三―五六五九―三〇八一

常岡幹彦

鶴田宏

日本舞踊

端唄

西崎祥

根岸妙

〒224-0027

横浜市都筑区大圃町五〇〇―一八
電話 〇四五―五九一―六六五五

青葉山 眞照寺
八王子 青葉霊苑
(都営八王子霊園隣り
第二期墓地分譲案内中)

住職 堀井隆川

〒193-0826

東京都八王子市元八王子町三-三九九七
電話 〇四二六-六三一八四〇三

村上末吉

村上久夫

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東三-四-十二
電話 〇三-三三三三-二一七-二三四

山口和久

恵理子
藤吉郎秀吉
賢一・寧々・愛々・茶々

〒196-0031

東京都昭島市福島町二-一〇-二七
電話 〇四二-五五四-八八六一

PHP文化フォーラム 植生の宿

代表 吉住自由造

〒216-0033

川崎市宮前区宮崎五-一五-三五
電話 〇四四-八六六-三六二一

渡邊隆男

集	記
編	後

★子供の頃から動物園として親しんでいた宝塚ファミリーランドが閉園したというニュースを聞きました。

その宝塚から、私が住んでいる近くの動物園に「ホワイトタイガー」が移ってきました。幸せを呼ぶ虎”として珍重されていますが、私にとっては少年時代がいっぱい詰まっている虎に見えてしまいます。(本城)

★私達夫婦の一つの時代が終わった。目下転換期のまっただ中。夫はこの十余年ふる里柏原で、園芸雑誌を片手に花を育て野菜を作って存分に畑仕事を楽しんできた。収穫期には茄子やきゅうりが毎日食卓にのぼり、「飯がわりに茄子炒めだ」「きゅうりばかりで胃の調子がへん」などと言ったのは今は懐かしい思い出。持病の関節炎がひどくなり、今年の一月末から田園生活を休止。東京で治療を続けていたが、小康を得たので八月と九月に二度帰柏した。夫の心は安らぎ、鬱々

とした気分が晴れた様子。私は父祖伝来の重みを伴ったふる里の癒し効果に感謝した。(鶴田)

★我が郷里を「神戸のチョット北です」と表現する人は少なくありません。外地で郷友に遭遇できるのは当方が発した強い信号に先方が応じてくる場合だけ。今春、駐印日本大使館でお世話になった際、政務担当公使が郷友と判ったのもこのケースです。周囲は「へエーお二人ともそんな山奥の出身なの？」そう言われるのが嫌で沈黙か？私も学生時代「福知山線で」と言っただけで「田舎やなあ」と片付けられました。(徳田)

★私事ですが、本年六月を以って四十数年の勤め人生活を打ち上げ、「自由の身」となりました。これからは何もかも自身で考え、判断し実行しなければならぬ境遇になり、ずばらな私は、いささか戸惑っています。

これまで私の勤務先に置いておりました本会事務局が奥付に記載したように自

宅に移転しました。なお、書状等のご連絡は、当分元の勤務先(DMS)でも受け付けますのでご利用ください。(坂上)

★いよいよこの十一月から「丹波市」になります。人口は約七万三千人と県下で一四番目だそうです。面積は神戸に次いで二番目とのこと。まさに「広域」行政に期待が寄せられるところ、どのよう

山ざる 第35号

平成十六年十一月一日発行

〈員〉 足立静雄 池田 忍 木呂子恵美子
 足立和巳 小田富士夫 片岡クミ子
 委 坂上勝朗 常岡幹彦 鶴田ゆき子
 集 徳田八郎衛 本城英明 渡邊隆男
 〈編〉

発行者 関東水郷友会会長 渡邊 隆男

〒174-0064 東京都板橋区中台3-27-111-401

坂上勝朗方・関東水郷友会事務局

☎〇三(三九三三)二四〇一

振替〇〇一〇一三一三三三三〇

製 株式会社二玄社

編集協力 株式会社ホンゴ出版



ハートへ、ダイレクト。

企業のメッセージを、お客様一人ひとりに向けて直接的に結びつけること。そしてお客様に心からご満足いただける商品やサービス、情報を提供し続け、企業との間に揺るぎない信頼関係を築くこと。これが、DMSの提唱してきた「ダイレクト・コミュニケーション」です。業界のリーディング・カンパニーとして長年培ってきたノウハウはデータベース活用やデジタル・テクノロジー、ロジスティクスと多岐にわたり、多くの企業からご評価いただいています。また、大切なお客様のプロフィールを扱う立場から個人情報保護にも積極的に取り組み、公的な認証である「プライバシーマーク」を取得しました。これからも、「コミュニケーション・クリエイター」として、企業戦略と生活者のプライバシーを尊重した、お客様の心をつかむプロモーションをご提案してまいります。



株式会社 ディーエムエス

本社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1-11 DMSビル / 大阪支社 〒535-0031 大阪市旭区高殿7-15-8
DMS第二ビル / 板橋業務センター / 江東業務センター / 朝霞業務センター / DMSロジスティクスセンター

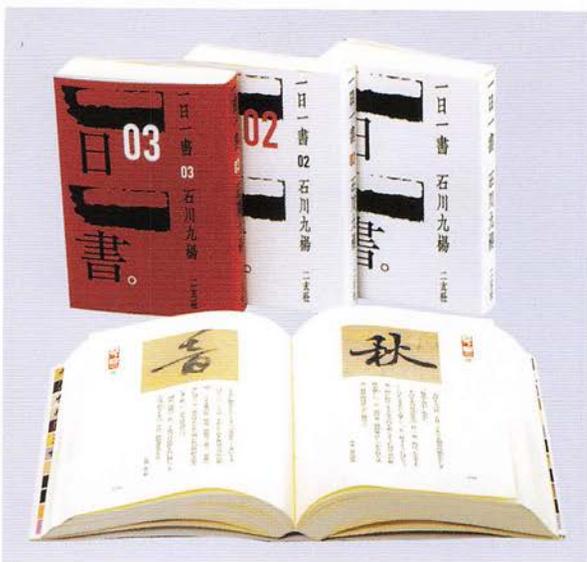
■お問い合わせ：営業本部 営業推進部 TEL.03-3293-2970 FAX.03-3293-8497
■インターネットホームページ <http://www.dmsjp.co.jp>

加盟団体 ▶ (社)日本ダイレクト・メール協会 / (社)日本テレマーケティング協会 / (社)日本通信販売協会 / (社)日本広告審査機構

当社はマーケティングサービス業界において最初にPマークを取得しました。また、日本工業規格「個人情報保護に関するコンプライアンス・プログラムの要求事項 JIS Q 15001」にも適合していることが承認されています。

一日一書 全三冊 石川九揚

歴代の名跡から選りすぐった、
 一千余の文字にちなむ珠玉のエッセイ集。
 灯火親しむ秋、話題の「歳字記」をお手元に。



名筆とエッセイで織りなす「一日一書」全三冊。
 王羲之から良寛、大久保利通まで、名筆の一点
 一画に先人の感性を読みとり、折々の行事から
 時事問題、歴史・文化・スポーツ・芸術と多彩な
 話題で、著者の闊達自在なエッセイを毎日添え
 る。第三巻の巻末に三冊分の文字索引を付す。

B6判変型・オールカラー・392×400頁
 ●各1890円(税込)

《本書の特徴》

- ◆一年三六五日、歴代の名跡より毎日一字ずつ選択して掲載。
- ◆名跡の魅力を余す所なく伝える、鮮明なカラー図版を使用。
- ◆中国(王羲之・顔真卿・懷素・趙之謙 etc.)並びに日本の名家(嵯峨天皇・空海・小野道風・良寛・副島種臣 etc.)の書を採用。
- ◆書体も、古代の甲骨文・金文から、篆書・隸書・草書・楷書、さらに優美な王朝の仮名にまで及ぶ。
- ◆各文字には、それぞれにちなんで四季折々の色彩を添えた、瀟洒な解説・寸評を配す。



 **二玄社** 社長 渡邊隆男

東京都文京区本駒込6-2-1 / 〒113-0021 Tel.03-5395-0511 Fax.03-5395-0515 <http://nigensha.co.jp>